

## 〈小特集〉高田保馬没後50年記念講演録\*

吉野浩司\*\* 渡辺恭彦\*\*\* 牧野邦昭\*\*\*\* 柳田芳伸\*\*\*\*\*

Proceeding of the Lecture: Marking the 50th Anniversary of Takata Yasuma's Death  
Koji YOSHINO \*\*, Yasuhiko WATANABE \*\*\*, Kuniaki MAKINO \*\*\*\*, Yoshinobu YANAGITA \*\*\*\*\*

はじめに — 高田没後50年にちなんで  
吉野浩司 (鎮西学院大学基盤教育センター教授)



この小特集記事は、2022年の高田保馬没後50年を記念して、吉野が中心となり企画した、自伝の編集・出版、ならびに講演会の記録を兼ねたものである。その中心となるのは、2022年7月から10月にかけて開催された、「高田保馬没後50年記念自伝『私の追憶』読書会」である。これは、社会学、経済学、文書館学、人口学の専門家を招き、高田の生涯の学問と思想をたどったものである。全4回シリーズの演題を示すと、下記のとおりである<sup>3</sup>。

吉野浩司「高田保馬の学び—佐賀中学・熊本五高・京都帝大」(7月2日)  
渡辺恭彦「高田保馬の遺産—京大文書館「高田保馬関連資料」」(8月6日)

牧野邦昭「高田保馬とその政策論—農業・貧困・国土計画」(9月10日)  
柳田芳伸「今日の少子化から見詰める高田保馬の人口論—マルサスの人口論と比較して」(10月1日)

毎回20名前後の参加者が佐賀新聞社5階会議室に集い、13時30分から15時まで講演と質疑応答が行われた。以下の章は、各報告者が自らの講演内容をもとにまとめなおした原稿をあつめ、掲載したものである。したがって各章ごとに著者が分かっている。また文体も、あるいは論文形式、あるいは講演録形式と、あえて統一していないことを、あらかじめ断っておく。

\* \* \*

<sup>3</sup> 各回の内容については、次章以下の文章を参照のこと。

\* Received October 3, 2022

\*\* 鎮西学院大学基盤教育センター 教授

\*\*\* 京都大学大学文書館 特定助教

\*\*\*\* 慶應義塾大学経済学部 教授

\*\*\*\*\* 経済学博士 (京都大学)、長崎県立大学 名誉教授

第1章 高田保馬の学び—佐賀中学・熊本五高・  
京都帝大

吉野浩司

第1節 『高田保馬自伝「私の追憶」』について

20世紀の社会学と経済学を中心とする社会科学に大きな足跡を残した高田保馬（1883-1972）は、2022年に没後50年を迎えた。それを記念すべく吉野と牧野邦昭は、これまで未刊行となっていた、高田の重要な自伝を編集し、刊行した（吉野浩司・牧野邦昭編『高田保馬自伝「私の追憶」』2022年4月、佐賀新聞社刊）。これは幼少期から敗戦までの半生を綴った、彼のもっとも詳細な自伝である<sup>1</sup>。

出版後ただちに書評が現れた。地方の出版社が大きく取り上げられたという意味で、望外の出来事であった。現在までに取り上げられた書評は下記のとおりである。

筒井清忠「近現代史ブックレビュー【第15回】

近代経済学の創始者・高田保馬の人生に学ぶ」『Wedge=ウェッジ』2022年6月号

根井雅弘「〈書評〉『高田保馬（やすま）自伝「私の追憶」』吉野浩司、牧野邦昭編

『東京新聞（Web版）』2022年7月10日付

田中秀臣「或る経済学者の孤独な魂の漂泊の記」『週刊新潮』2022年9月1日号

高田が終生大事にした郷里佐賀、この地の出版社から本書が刊行されたことは、たいへん意義深いことである。高田保馬は佐賀の数多くの小中高の学校の校歌を手掛け、現在でも、県民の人々に親しまれている。

高田が歌詞を手掛けた校歌一覧

学校名	制定
佐賀県立有田工業高等学校	1925（大正14）年
佐賀県立佐賀農業高等学校	1925（大正14）年
富士町立北山小学校	1932（昭和7）年
三日月町立三日月小学校	1947（昭和22）年
佐賀県立佐賀西高等学校	1949（昭和24）年
武雄市立武雄小学校	1953（昭和28）年
小城市立小城中学校	1953（昭和28）年
三日月町立三日月中学校	1955（昭和30）年
小城市立三里小学校	1958（昭和33）年
佐賀県立佐賀北高等学校	1966（昭和41）年
若木中学校	不明

また県内の各所に高田ゆかりの場所・資料が存在する。そうした土地の人々が入手しやすい形で、本自伝は出版されたことになる。佐賀では、この出版を機に、没後50年を記念する講演・読書会が企画された。

佐賀新聞社主催の読書会に先立ち、6月11日に佐賀城本丸歴史館（外御書院）で開催された、「第209回 歴史館ゼミナール」で、吉野は「高田保馬にとっての肥前三日月村—自伝『私の追憶』を読む—」と題する講演を行った。高田が郷里と切っても切れない関係にあり、それが彼の人間関係のみならず、学説にまで影響を与えていることを示した。当日は、91人の参加者があり、新聞にも取り上げられた<sup>2</sup>。本報告（本章）はその続きをなすものである。

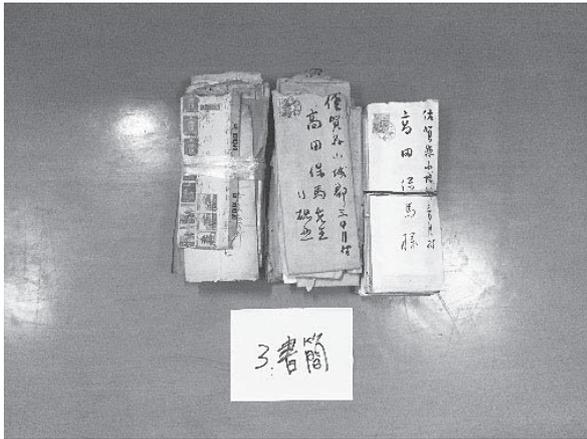
第2節 生家の解体と新資料の発見



<sup>1</sup> 戦後の自伝としては『学問遍路』がある。また『社会歌雑記』や『思郷記』をはじめとする随筆・随想の類にも、自伝的記述が盛り込まれており、彼の生涯を知る格好の素材を提供している。

<sup>2</sup> 「社会学者の偉業、佐賀への思いから 高田保馬（小城市出身）テーマに講演：自伝出版 編者の吉野浩司鎮西学院大教授が解説」『佐賀新聞』（Web版2022年6月11日、[https://www.saga-s.co.jp/articles/-/868700?fbclid=IwAR1-71pcaIw46\\_u1EiNBch8kcu31TFDpbTBAMbFaZvgS8OBCDNbuMUuIlyw](https://www.saga-s.co.jp/articles/-/868700?fbclid=IwAR1-71pcaIw46_u1EiNBch8kcu31TFDpbTBAMbFaZvgS8OBCDNbuMUuIlyw)）0）〔2022年9月28日閲覧〕

まずは直近の話題として、6月18日の高田の生家（佐賀県小城市三日月町）の解体作業を取り上げたい。老朽化によりかなり傷んでいたため、かねてより解体の話は上がっていた。実際に解体されるとの一報が入り、吉野は生家の解体に立ち合い、家屋構造の記録を残しておくために、内観の撮影とドローンによる外観の撮影をすることができた。



自伝の中で、高田はこの家を建てたときのことを、次のように記している。「大正一三（一九二四）年、東京から帰るときに三日月村永住をきめ、一四年には祖先の家をといて家を構えた。構えるにしても東京の地震にこりこりして、地下に狂気じみた地堅めをして丸太を打ちこみ、砂利とセメントを流しこんだ。郷里の墓を守り郷里の土になる心構えであった」（『高田保馬自伝「私の追憶」』215頁）。この築100年に近い家屋は取り壊された。

解体に際し、さすがに寂しいものがあったが、これまで知られていなかった新資料が多数発見されるという喜ばしい出来事もあった。書（掛け軸）、肖像画、胸像のほか、高田の直筆文書、高田家伝来の古文書の類も多数残っていた。また高田が使っていた2階の書斎の押入れの奥からは、柳行李が出てきて、高田の自筆の原稿、与謝野寛、米田庄太郎、左右田喜一郎、森嶋通夫らの私信（上掲写真）、あるいは九州時代の教え子である大道安次郎の卒業論文、交流のあった早川三代治による『純理経済学序論』の原稿など、貴重な資料が続々と出てきた。

高田の自伝には、与謝野寛・晶子夫妻との関係も数多く書き込まれている。きっかけとなったエピソードがある。「私の大学院生活の第一年には、同じ下宿の文学部の安井定四郎氏と親しくした。これは瀧〔正雄〕氏を通しての学友である。安井氏は与謝野夫妻の新詩社に歌を送っていた。

私もそれにつりこまれて歌を送った。当時、『明星』は廃刊になっており『トキハギ』という小さい雑誌が出されていた。私が明治四三（一九一〇）年中に歌を送ったのは二回だけ、四四年春に一回送った。四四年の三月の暮れの一晩、感興にまかせて三〇首ばかりをえた。作ったというより内心からわきでてきたのである。それを郵送したら与謝野寛氏の激賞を受けて、これから別格の取り扱いをするといってきた。手帳の隅に「唾手一番を要するのみ」と書いたのは、このころのことであろう」（同書49頁）。そうした縁により、JR小城市駅前の高田の歌碑には、いっしょに与謝野夫妻の歌も彫り込まれている。

いっぽう早川三代治についても、「早川教授が大正の終り、すでにワルラスの『入門』をはじめ、パレートの著作のいくつかも訳出し、素養が広くローザンヌ学派におよんでいた。早川教授の精進は今から見て驚異とするに値する」（同書151～152頁）と高く評価しているが、その早川の手書きの原稿が、何十年もの間、高田の郷里の書斎のなかで眠っていたことになる。早川はわざわざ手書きの原稿を高田のもとに送ったこと、その原稿を高田もたいせつにとっていたこと、そこに二人の友誼の篤さを感じ取ることができる。

吉野は、生家の管理者の了解のもと、すぐさま佐賀市歴史資料館に連絡を入れ、資料の寄贈を打診した。

### 第3節 地方における高田研究の今後

今後は、おおむね2つの方向での調査・研究・勉強会を考えている。第一に調査研究の方は、小城市歴史資料館の依頼により、2022年10月より、上記の資料の整理の手伝いをするところになっている。上に紹介した新資料を含むすべての資料を、できるだけ早く市民および研究者の研究資料として活用できる状態にしたいと考えている。

第二に、勉強会に関していうと、佐賀新聞社で行った読書会の継続が、参加した市民の方より提案されている。場所や頻度や期間などを決めて、これも速やかに実施の方向で考えたい。

\* \* \*

著名な学者の学説を考える際に、書物に書かれた理論や思想を追うだけだと、どうしても取りこぼしてしまうものがあるのではないかと。学者の理論および思想には、それを生んだ学者の人生と

切っても切れない深い関係がある。佐賀時代には誠友団という青年団で精神を鍛えられ、五高時代には、のちに政治家となる瀧正雄、文学者・教育者となる下村湖人らとの友情を深め、京都帝大時代には米田研究室で一对一の社会学講義を叩き込まれた。学説や理論や思想を書物からながめてみただけだと、高田保馬は極めて冷徹とした理論体系の持ち主である、という風にしか感じられない。しかし逆に、人間高田保馬から学説や理論や思想を見直してみると、人類に対する情味溢れる、哀しみを湛えた理論、しかしそれであるがゆえに、人を鼓舞するところのある理論のように思えてくる。

高田の足跡を訪ねるとするなら、学生時代を送った佐賀（小学校、中学校）、熊本（高校）、京都（大学・大学院）、大学教員として生活した広島（高師＝現広島大学）、東京（高商＝一橋大学）、福岡（九州帝大＝九州大学）を挙げることができよう。研究したり教えたりするために、高田は各地を転々とした。過ごした時間の長短はあるだろうし、土地の気風への好悪もあっただろう。ゆく先々での人々との出会いと交わりと別れとがあった。それらは直接的ではないにしても、理論と思想の中に深く刻み込まれている。そのあたりの機微を味わうには、自伝を含む高田の著作の他に、その土地土地に残された史資料の痕跡に触れなければならない。現在、地方には資料館・公文書館があり、大学には文書館が整備されつつある。高田についていうと、小城市歴史資料館、佐賀県立図書館、五高記念館、京都大学・広島大学・九州大学の文書館などが直ちに思い浮かぶ。これらに残された高田の痕跡を探し出し、そこから彼の理論と思想の襞に分け入っていくという作業は、今後ますます進んでいくであろう。高田のような郷土愛が強く、人情味豊かな学者ならなおさら、そうした作業は不可欠のものであるといえるだろう。

少年のころに高田が受けた、郷里佐賀とそこでくらす人々への想いは、次のようなものであった。「私〔高田〕の近所はすべて小作農ばかりであった。一部落二〇戸、たいていは小作であるのみか、明治のそれは地主の圧力によって気の毒な生活をつづける外はなかった。私の家は豊かであるとはいえないが、近所の家についてその様子を知ると、多感の少年はいつも胸が痛んでいた。その気持ちの私に与えた一論文〔少年雑誌に載った千葉亀雄の文章〕の影響は大きかった。ふりか

えて見ると、それが私の一生の方向を定める、ひとつの要素になっていたといっても、少なくとも私だけは誇張であるとは思わない。中学五年の早春のある夕ぐれに落日を仰いでの感激をかつてのべたことがあるが、それは弱き者のために死のうということであった。そこで中学の交友会雑誌『栄城』（佐賀中学校栄城会）にのせた論文は貧乏に関するものであった」（7頁）。

この一文には、のちの高田の階級論、民族論、耐乏論、勢力論、世界社会論の根底に秘められた思念がある。高田の冷徹で剛直な理論と思想を裏で支えている、あたたかく、やわらかな、しかし一本筋の通った何ものかが感じられる。それは学問にたずさわる者すべてが、忘れてはならない何ものかである。

## 第2章 京都大学大学文書館所蔵「高田保馬関係資料」について

### 渡辺恭彦（京都大学大学文書館特定助教）

はじめまして、京都大学大学文書館の渡辺恭彦と申します。今回、『高田保馬自伝「私の追憶」』の刊行記念講話にお声かけいただきまして、あらためて御礼申し上げます。

簡単に自己紹介をさせていただきますと、私はこれまで戦後のマルクス主義哲学者である廣松渉を研究して参りました。最近では、60年代末の全共闘運動を支持した作家、文学者である高橋和巳の研究や、日本における新カント派受容に関連させて、西田幾多郎や田辺元、三木清などの研究を進めております。高田については門外漢です。学部生時代に『命題コレクション 社会学』で「結合定量の法則」の解説を読んだ程度で、人間関係や社会関係をテーマとした社会学者という認識でした。大学院に進学したころに、出席していた演習形式の授業で高田の『勢力論』とタルドの『模倣の法則』が同じ時期に取り上げられ、高田の凝縮された思考に四苦八苦したことが思い出されます。

今回お話しさせていただくことになったきっかけは、約1年前に遡ります。勤務先の京都大学大学文書館で高田保馬関係資料を公開した矢先に、吉野先生が早々に利用申請をされ、来館されました。高田自伝のための資料収集が主たる目的だったと記憶しています。その際に、高田保馬関係資料を使った共同研究について話が及びました。私自身、高田保馬関係資料を手掛かりに新たな研究を模索し始めたところでしたので、今回の講話は大変ありがたいお話だと思い、お引き受けした次第です。

本日は、大学文書館での活動や高田保馬関係資料が寄贈された経緯、著作権対策などについて簡単にご説明したうえで、資料現物について高田の仕事と関連させてお話ししたいと思います。

### 第1節 寄贈の経緯と著作権対策を経た公開まで

京都大学大学文書館は、国内で16ある国立公文書館等の一つで2000年に設立されました。所蔵している資料は、法人文書、寄贈寄託資料や刊行物、図書等に分類されます。法人文書とは、京都大学で使われていた学内の事務文書で、現場で使われる現用段階が終わると、毎年一定の分量が大学文書館に移送されてきます。文書館では、移送された文書を評価選別し、保存するものと廃棄す

るものに分けていきます。

寄贈寄託資料というのは、京都大学の歴史に関係する資料の寄贈を受けたものになります。京都大学に勤めた先生の御遺族から寄贈されるものが多く、高田保馬関係資料もお孫さん2名（椽村氏、水渡氏）から寄贈されました。元々、椽村氏と水渡氏の双方が高田保馬の資料を別々に保管されており、2019年に約2000点をまとめて寄贈されたという経緯があります。資料として公開するには、目録を作成しなければなりません。大学院生が週1回の勤務で2年ほどかけて、目録作成、整理、分類した後、2020年4月に、ようやく公開の目途がたちました。

一度公開し、利用申請も複数件あったのですが、高田保馬の没年が1972年であり著作権保護期間の70年を経過していないことから、著作権について慎重な意見が出ました。著作権法のコメントール等を確認したところ、著作者人格権公表権に抵触する可能性があることが分かりました。そこで、一度高田保馬関係資料を非公開とし、著作権の対策を行うことになりました。早速、高田保馬関係資料の寄贈経緯や資料の特性をまとめて、大学の総務部法務の弁護士にメールで法務相談を行いました。

メールでの相談を重ねた結果、著作権法第18条、60条、116条に留意する必要があることが分かりました。第18条は、高田保馬の著作物を公開する場合、高田のものとして公開しなければならないということです。第60条は、高田本人が自分の原稿を公開されてもよいものと考えていたかを考慮に入れなくてはいけないということです。第116条が今回特に対策した条文です。著作物の公開が著作者にとって不名誉であると著作者の遺族（直系の孫）が見なした場合に、遺族はそれを差し止める権利を有します。今回、高田資料を寄贈されたのは椽村氏と水渡氏でしたが、そのほかの直系の孫が第116条を行使するという事も考えられました。

また、高田宛て書簡類の著作権についても配慮しなければいけないことが分かりました。書簡の差出人の著作者は、寄贈とは無関係に外部にいることになります。書簡の差出人から直接許諾を得ることができれば、すぐに公開できるのですが、すでに存命でない場合には、差出人の直系のお孫さんすべてから了承を得る必要があります。これは、実際の運営では現実的ではないので、直系のお孫さんが亡くなっている時期を推定し、それ

を過ぎていけば公開するという対応を取ることになりました。著作者の生年が1880年以前ならば公開するという基準は、文書館の推定で算出した年数に基づいています。

このように著作者人格権への対応を文書館としてまとめたうえで、水渡氏のお宅に伺い、椽村氏と水渡氏にあらかじめ著作権について説明しました。直系の孫で存命なのはお二人のみであることが確認でき、お二人から資料の公開も快諾していただきました。さらに追加の資料を受け取ることもできました。お話を伺う中で、お二人が幼少のころに祖父高田保馬と接した思い出なども聞くことができました。孫のことを「お宝ちゃん」と言って可愛がってくれたそうです。また、『自伝』にもあるエピソードですが、布団に寝そべったまま、インクで書き物をしていたそうです。晩年洋書はあまり読んでいないようだったとの話も出ました。

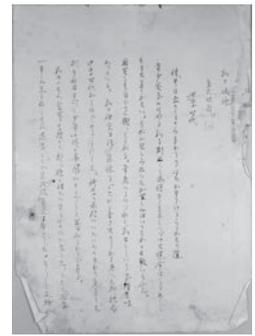
このような対策をしたうえで、高田の資料を公開することができたのですが、高田宛ての書簡類はやはり非公開とせざるを得ませんでした。500通に及ぶので、個人的には大変残念なのですが、公的機関の対応としては致し方ないところです。

## 第2節 京都大学大学文書館所蔵 高田保馬関係資料の紹介

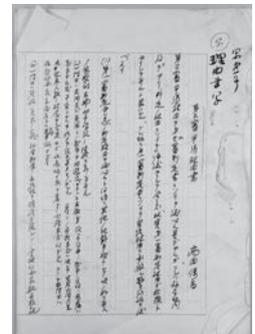
高田保馬関係資料は、現在京都大学大学文書館のホームページ上で所蔵リストを公開しておりますので、よろしければ実際に御覧になっていただければと思います。原稿、請願書等、ノートといったカテゴリは、担当者が資料現物を1点1点見て整理・分類した方法に基づいています。1500点ほどあるなかで、大半を占めるのが原稿類です。原稿用紙やレポート用紙に高田本人が書いた原稿で、とても小さな字で書かれているものもあります。出版用原稿も癖のある字で書かれており、出版社は受け取ってどのように活字化したのだろうと思わせるものもあります。また、高田直筆とは思えない、大変整った筆跡のものもあり、別の人物が清書したのではないかと推測されるものもありました。たとえば、皆さんがお持ちの『自伝』の書き出しの原稿も残っていました。高田の原稿のなかでは、判読しやすい部類に入ると思います。『自伝』を読まれる時に、照らし合わせてみると、高田の心境に近づけるような気になるかもしれません。

次の分類が「請願書等」です。教職適格審査と

いって、敗戦後に戦時中の発言や言論が調査され、戦争を肯定するような言説を公表していたと見なされた者は、公職追放の憂き目にあいました。京都学派の哲学者が軒並み公職追放にあったことはよく知られているかと思います。高田も「民族と経済」という文章で全体主義的で時局に迎合する言説を公表していたと見なされて、教職を辞することになりましたが、その後その解除を求める請願書が本人や親交のあった学者から多数提出されました。お配りした「第三審申請理由書」（識別番号高田3-5）は高田本人が書いたもので、戦前戦時中の言動について説明がなされています。軍部と接触がなかったことや太平洋戦争開始に反対の意見を持っていたこと、



京都大学大学文書館所蔵「私の追憶」(高田保馬関係資料、識別番号高田1-3-8)



「第三審申請理由書」(識別番号高田3-5)

ナチスから亡命した学者ベルリン大学前教授のオッペンハイマー氏に接近して、学問的に交流していたこと、などが挙げられています。また、思想上の立場についても、本来思想的に国際主義者であり世界主義者でもあること、日本精神日本学の反対者、ナチス学問ナチス思想の反対者、マルクス主義共産主義の反対者であること、40年を通じて西欧社会科学の正統に立ちその自由主義的立場を離れないこと、多元的国家観の熱心なる支持者として終始し国家主義自体の批判者であること、その民族主義は民族人格の相互尊重の原則に立つところの国際主義にほかならず、したがって日本の進取的態度による戦争に理念的基礎を与えることは本来ありえないこと、東亜民族主義も東亜とその外部との人格的相互尊重を基調とする世界主義的背景の上に立っていること、などが挙げられています。

次の「ノート」というカテゴリも、研究利用に際して大変重要なもので、著作物には直接表れない高田の思考の軌跡を窺い知ることができます。これについては、後ほど、いくつかの論点を仮説として示してみたいと思います。辞令、写真・ア

ルバム、新聞切り抜き、著作・論文というカテゴリが続きまして、著作・論文の多さからは、高田の超人的な仕事ぶりを窺い知ることができます。

これらの資料現物を見ていただくには、HP上にある利用請求書を文書館に提出していただき、個人情報や先に挙げた著作権者人格権に関する利用審査を経たうえで、閲覧に供するというようになります。また、来館されなくても、複写物として写しの依頼を出していただくこともできますが、この方法は費用が多くかかってしまいます。いずれにしても、興味を引かれて実際に現物を見てみたいという方は、ぜひ文書館の資料をご利用いただければと思います。

### 第3節 高田と米田庄太郎

次に文書館資料を眺めて、私なりの視点からいくつかの論点を提示したいと思います。まず初めに、師である米田庄太郎から高田への学問的な影響についてです。米田庄太郎は、海外で学問的なキャリアをスタートさせ、フランスのガブリエル・タルドやアメリカのギディングスのもとで社会学を学びました。タルドは、模倣論や社会法則に関する著作を残した社会学者でデュルケームの向こうを張った人物として知られています。近年では、フランスの哲学者ドゥルーズが参照していたことから、タルド・ルネッサンスともいべき活況を呈し、日本でも10年ほど前に翻訳や研究書が立て続けに出版されました。そのタルドに直接学び、早々から日本に紹介していた米田は日本におけるタルド研究の先駆者といえるでしょう。『自伝』でも、高田によって米田の天才的な語学力と博覧強記ぶりが語られています。京都大学でラテン語を講じていたこともあるというから驚きです。

また、高田も『自伝』で米田が国内で学問的ななかなか認められず不遇の目にあってきたことに触れていますが、私が米田のことを知ったのは、全共闘を支持した高橋和巳「わが解体」の冒頭に引かれたフランス文学者桑原武夫の「人間の戦い」という文章からでした。そこで桑原は不遇をかこった学者として米田を挙げています。すこし長くなりますが、引用を読みます。

桑原武夫「人間の戦い」（高橋和巳『わが解体』（1969）の引用では米田は伏字。）

「かつて京都大学に米田庄太郎博士という社会学者があった。この人は長らく不遇だったが、さいごに教授になられるとき、問題が起った。教授

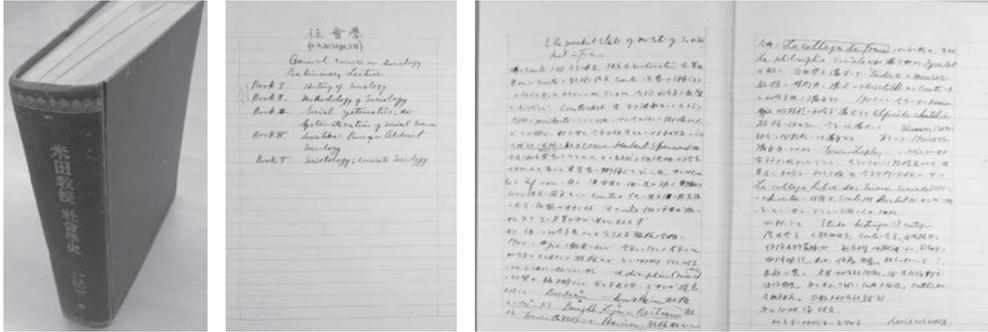
会で反対が多かったのである。私は学問の名によって率直にいうが、同博士の学問は必ずしも一流ではなかった。粗末なところもあった。そういう方面からの反対ならば、やむを得なかったともいえるが、反対論の有力なものは学問的なものではなかった。博士が部落出身だということが、反対の理由なのであった（私の父がそのころ同じ文学部の教授で、その間の事情を私は父からきいて知っているのだ）。H教授のごときは「米田を教授にするというが、自分は教授会で××などと席をならべることは真平ごめんだ」といった。そして結局、米田氏は一おう教授にするが、発令と同時に辞表を出してもらい、一年後（？）には必ずやめさせるということになった。/これは許すべからざる人間蔑視である。ところで問題は、こうした非人間的決議をした当時の京大文学部は、よほどつまらぬ学部だったかということ、学問的には当時に日本をリードしていた一流学者の集りだったという事実である。」（『桑原武夫全集 第五巻』朝日新聞社、1969年、53-54頁）

ここで桑原は、京大文学部に残る封建的な風土を批判するために米田のことを例に出しました。それと同時に、そうした不遇の目にあったことが、米田を超人的な精進へと駆り立てたのではないかと述べています。

高田が学問に打ち込むエネルギーには驚異的なものがあります。京大入学以降、米田の警咳に接したことも、それを後押ししたのではないのでしょうか。高田の『自伝』や弟子筋が著した『高田保馬博士の生涯と学説』（1981）を見ましても、高田の思想形成や学問上の訓練において米田がいかに大きな存在であったのかが分かります。

「米田教授 社会学史」と書かれた製本冊子にはノート4冊が綴じられており、1907-1910年と書かれていることから、高田が京大に入学した1907年から4年間の講義をノートに取ったものと分かります。聞きながらノートを取ったのか、それとも後日清書したのかは分かりませんが、ここまで丁寧に保存されているノートはほかになく、大学時代の勉学の原点として高田がとりわけ大事にしていたことが分かります。

高田が社会にある貧困をなくすという社会主義的情熱を強く持っていたことは『自伝』でも触れられていますが、それに冷や水を浴びせ、理論と実践を厳しく分けなければいけないと戒めたのが米田庄太郎でした。それはなにも、社会主義的情熱を持つことがいけないということではありませ



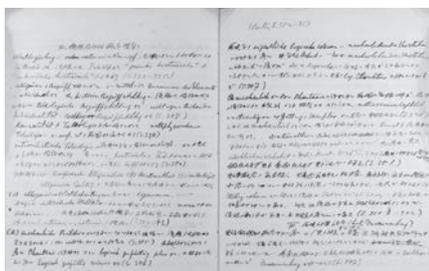
「米田教授 社会学史」(高田4-1)

ん。その情熱を学問研究にそのままち込むのではなく、学問のフィールドでは、事実の記述や理論の構築に徹しなければいけないということです。同様の考えを、マックス・ウェーバーが同時代に「価値自由」の概念で示し始めていました。高田にはじめて会う人は、学問的な業績から恐ろしい先生という先入観を持って会うのですが、穏健で情に篤い人柄と分かり驚いたというエピソードが残されています。

学問の方法論上の問題についても、高田は米田から本来の思弁的な資質とは逆に、特殊な問題を選び、事実を記述するという実証的な方法を求められていました。科学方法論の区別は、新カント派の哲学者ヴィンデルバントやその弟子であるリッカートが提示したもので、その影響があるのではないかと推測されます。

ヴィンデルバントは法則定立的な自然科学と個性記述的な歴史科学を分け、歴史学を芸術に近いものであるという考えをストラスブール総長就任講演で述べました。それを発展させたのがリッカートで、自然科学の普遍化的方法に対して、文化科学は個別的であることに加えて価値に関係づけられたものであるという区分を立てます。

この新カント派の哲学は、京都学派の西田幾多郎や田辺元、リッカートに学んだ左右田喜一郎が



「Methodologie der Kulturwissenschaften 雑考 [1920]」(高田4-15)

1910年代半ばから日本で受容しましたが、高田のノート類を見ますと、驚くほど熱心にリッカートの原著を読んでいることが分かります。ちなみに、新カント派の影響がある人物としては、高田

はほとんど名前が挙がりません。1920年ですから、すでに高田が教壇に立っていた時期ですが、表向きの実績には表れないところでも、手を抜かず最先端の国外の潮流を取り込んでいく研究姿勢を窺うことができます。参考資料としてお配りした「Methodologie der Kulturwissenschaften 雑考 [1920]」は、ウェーバーの「客観性論文」(「社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」)への影響も指摘されているリッカート『自然科学的概念構成の限界』(初版1902、6版1929)の読書ノートで、原著を自分で訳しながらノートを取っていることが分かります。『自伝』でも、高田は高校時代にドイツ語の修練を1年間積んだと述べており、ドイツ語文献も自在に読みこなしていたようです。なぜリッケルトを読んだのかが気になるところで、同じ時期に米田がリッケルトを参照した著作を立て続けに公刊していることと、リッケルトに依拠する左右田の論文を高田が書評したことも関係しているのではないかと推測されます。左右田に対しては、自伝執筆の段階でも、その著作の内容をしっかりと理解することはできないものの学術上の最高峰であると賛辞を惜しみません。

もう一点お配りした「Kultur u. Kulturwissenschaften 雑考 [1920]」は、新カント派ヴィンデルバント、リッカート、ラスクの原著をまとめたノートです。ノートの末尾にPlanと書かれたページがあり、おそらく今後の研究計画をメモしたものと思われます。そこには、リッカート、ヴィンデルバント、ジンメルなど新カント派とディルタイの精神科学、西田「意識の内容」、左右田「価値の体



「Kultur u. Kulturwissenschaften 雑考 [1920]」(高田4-16)

系」などの再読が挙げられています。別のページでは田辺元の論文も挙げられており、この時期京都学派の哲学者の仕事にも目配りしていたようです。『自伝』では、京大で講師として授業を担当することになった後も、米田や西田の授業に出席していたことが触れています。

高田の表向きの仕事には表れていないかもしれませんが、高田自身述べているとおり、哲学的な素養がその後の経済学や社会学の研究に寄与したといえるでしょう。

#### 第4節 高田とマルクス

最後に、高田とマルクスの関係について触れて締めくくりたいと思います。高田は一貫してマルクスに批判的な立場を取りました。『マルキシズムの経済学的批判』(1932)、『マルクス経済学論評』(1934)、『マルクス批判』(1950)、『経済学説の展開』(1952)等といった著作がマルクス批判の研究として位置づけられます。これらの著作を繙きますと、たんなる「マルクス批判」というよりも、マルクスを深く理解したうえで矛盾を指摘し、唯物史観とは別の「第三史観」を構想しようとしたとみる方が適切であるように思います。「批判」は誤解を生みやすい言葉です。単に相手を貶めるという意味ではなく、「限界」を見定めるといった意味で理解したほうがいいでしょう。たとえば、カントの『純粋理性批判』、マルクスの『経済学批判』といった書名にあるKritikという表現は、内部からその限界を明らかにするという意味です。高田がマルクス批判を著していることも、マルクスの著作を理解した上で、その矛盾や限界点を指摘するという意味で理解するとよいと思います。

『マルクス批判』(1950)の自序には、唯物史観研究の先達である米田庄太郎によって、40年前にマルクス学説、マルクス思想への眼を開かれたと書かれています。1910年頃には、マルクスに触れていたということになりますが、この時期日本でマルクスはどのように読まれていたのでしょうか。マルクス経済学者の遊部久蔵が弟子筋と協働して編んだ『「資本論」研究史』(1958)をもとに辿ってみましょう。

『資本論』の翻訳の歴史をふりかえりますと、1900年代に幸徳秋水や堺利彦がマルクス・エンゲルスの著作を翻訳し始めました。高田が幸徳秋水『社会主義神髓』(1904)を読み、社会主義思想に触れたのもこの時期ですが、その時点ではマルク

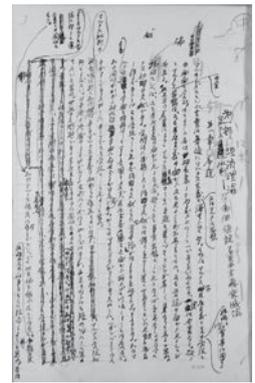
スのことを何も知らなかったといえます。

その後、山川均が資本論の解説論文を1907年に著し、ニーチェの文語訳も行った生田長江らが『資本論』の一部を訳しはじめました。最初の『資本論』完訳は、1920年から24年に出された高島素之訳になります。その後、1927年になると、河上肇、宮川実共訳による『資本論』が出され、マルクス経済学の研究に寄与する翻訳となりました。

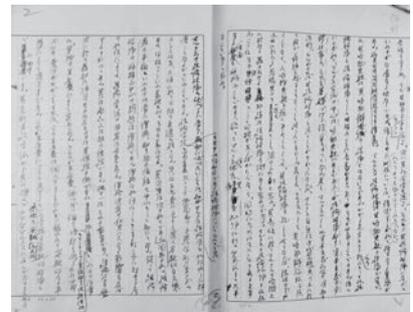
マルクス経済学の研究が本格化するのは、1920年の高島訳刊行以降になります。高田とも論争した福本和夫がマルクス主義を日本に持ち込んだのが1926年ですから、この時期は、マルクス経済学とマルクス主義が混在していたと見られます。京大経済学部では、マルクス経済学を講じていた河上肇が学生の信奉者を多く集めていました。1925年、学生のマルクス主義研究サークル(社会科学研究会)が治安維持法により摘発されました。これは京都学連事件と呼ばれます。学生たちの指導をしていたと見られた河上は、文部省から左翼教授と名指しされ、職を辞しました。

高田は河上の後任として教壇に立つことになりました。これが1929年のことですが、論戦を挑んでくるマルクス学生に対して、冷静に正面から反論したといえます。この時点で高田のマルクス理解はかなり高い水準にあったと思われます。

実際に、高田のマルクス理解に関係する資料を見てみましょう。高田は1930年代のマルクス批判以降、一貫してマルクスの労働価値説等に批判的な立場に立っています。1950年にあらためて刊行した「マルクス批判」においても、関心を失った思想としてしりぞけるのではなく、執着心を持って叙述していることが目を引きます。一度批判すると、その批判対象からは離れ、別の方面に目を



「マルクス批判」  
(高田1-1-14)



「マルクス経済学の輪郭」  
(高田1-1-419)

向けるものですが、マルクス批判を一通りやった後に、もう一度詳細な批判を著したところに高田の学問的誠実さが表れているともいえます。

「マルクス経済学の輪郭」(高田1-1-419)には、「マルキシズムの経済学的批判」(1932)の活字印刷と一緒に綴じられており、その草稿と推測されます。高田は『資本論』の目的と内容が資本主義の没落を理論的に論証することにあると述べます。「資本主義の没落」という言い回しは高田がよく使う独特なものであり、発想の由来を検討する必要がありますと思われる。また、マルクス経済学における盲点と見なす恐慌については、マルクス研究から出発したツガン・バラノウスキによって研究の大綱が作られたといえます。ツガンは米田庄太郎が1920年前後の著作で参照している学者であり、高田のマルクス理解は米田に負うところが多いということが確認できます。

高田は、『マルクス批判』の自序で、論争した人物として河上肇、櫛田民蔵、福本和夫の3人を挙げています。マルクス主義者、マルクス経済学者として著名な3人ですが、高田との論争については、詳細な検討の余地が残されているでしょう。

概括しますと、高田は社会主義的な関心を持ちつつ、1907年から1910年にかけて米田庄太郎から受けた教でマルクスに触れたものの、当初からマルクスには批判的な立場を取っていました。これが米田の考えに強く影響を受けたものであるかは検討が必要です。ただし、一連のマルクス批判の著作からは、高田が『資本論』を通読し、他の経済学説と突き合わせたうえで、『資本論』の矛盾を突いていることが分かります。

マルクスから一定の距離を保ちつつ、その吸収もなおざりにしないという研究スタイルは、注目に値します。1910年前後から1925年までの高田のマルクス研究には今なお汲み出すものが残されていると思われます。

以上、仮説段階のものばかりで恐縮ですが、高田保馬関係資料から得た着想について述べました。ご清聴ありがとうございました。

### 第3章 高田保馬とその政策論—農業・貧困・国土計画—

牧野邦昭（慶應義塾大学経済学部）

#### 第1節 はじめに

高田保馬（1883-1972）は佐賀県三日月村（現・小城市）出身の戦前の代表的な社会学者、経済学者であり、特に理論社会学者、理論経済学者として知られる。その一方で高田は実際の社会問題、経済問題についても数多く発言し政策提言も行っている。高田の政策提言は高田の社会学・経済学理論と当時の社会状況が反映されたものである。本稿では高田の提言の基となる理論とそれに基づく政策論はどのようなものであったのかを紹介したい。なお本稿は高田保馬没後50年記念自伝「私の追憶」読書会（2022年9月10日）の講演内容を基に牧野（2011）、牧野（2012）、牧野（2018）を再構成したものであり、これらと重複する記述があることをお断りしておく。

#### 第2節 高田保馬の理論

##### （1）力の欲望を持ち、模倣する個人

高田社会学は「力の欲望」を持ち、力を誇示しようとする個人から出発する。高田は社会が成立する条件として、人間は他の動物と同じように他の人間と群れて住むことを望む「群居の欲望」を最も重要なものとして挙げているが、同時にそれ以外の条件として「家族的欲望と模倣」を挙げている。「群居の欲望」は他の類似した個体との群居によって満足され、類似は協働の機縁になるが「類似の著しき部分は模倣に負ふ」とするため、「模倣の社会結合に対して有する意義は極めて深い」（高田1923a：122-124）。

高田は個人の欲望が上の階級から下の階級に模倣され、さらにそれに対して上の階級が自分たちの地位を示すために新たな勢力誇示の方法を生み出し、それがまた下の階級に模倣され社会に広まっていくことが繰返され、社会全体の欲望が高まっていくことを重視している。

高田によれば、このような社会全体の欲望の高まりは「見え競争」によるものであり、これによって生活水準を高めてきたが、これは「即ち一種の蓄積」であり、「それだけの高さの生活標準を有つて居るといふことは、一朝必要がある時世の中の多くの人間の生活程度を幾らか下げることによつて、更に多くを養つて行くことが出来る」といふことを意味するのであります」（高田1927：109）。一部に食事にも困る人はいるにせよ、社会

全体で見れば生活の水準は過去と比べて著しく上昇しており、生活水準を切り下げる余地はいくらでもあるとするのが高田の立場であった。

高田の想定する個人は常に他者に優ろうとし、また最低でも他者に負けないようにするため他者と同じ行為を行おうとする。したがって、高田の想定する貧乏とは他者と比べて貧しいという相対的貧困になり、全ての人間が他者に優っていることを示そうとすれば、他人の消費水準よりも少しでも高い消費水準を維持しようとするため社会全体の消費水準を高めていくことになる。

消費の決定は個人の所得だけでなく他者の消費水準に影響されるという高田の主張は、現在では消費関数理論におけるデューゼンベリーの空間的相対所得仮説と合わせて高田＝デューゼンベリー効果として知られている。

##### （2）人口増加による社会の発展

力の欲望を持ち、それを誇示しようとし、他人を模倣する個人から成り立つ社会は、分業と階級の発達によって分化していく。高田は分業（そして分業によって成立する職業集団）と階級を同様のものと考えた。

高田は分業・階級の発達が文化を発展させることを主張する。分業は物質的財だけでなく精神的文化も発展させる。「経済的方面に於ける分業が物質的財の生産力を大ならしむる如く、其他の精神的文化の方面に於ける分業は同様に精神的文化内容の生産力を大ならしめる」（高田1923a：455）。

分業の条件となるのが人口の増加であり、また階級を形成するためには一定の人口が必要であり、階級形成は分業によって促進されるため、結局人口増加が階級を発達させる。人口増加による階級の発達が文化を発達させる。人口の増加により階級が発達すると上層階級は生産的労働から解放されて精神的文化の開拓を行い、分業の進展によって社会に余剰が発生すると上層階級はそれを用いて誇示のために新たな文化を発展させようとする。高田はこれに加え、人口密度が高まることで人々の接触を頻繁にし、それによって人々が他人に優越しようとする「力の欲望」が高まると共に、社会的な力の競争が高まって分業が発達し新しい文化内容が創造されるとする（高田1923a：457-458）。つまり、人口が増加すれば階級や分業の発達、人々の接触の増加により新しい文化が創造される。

現代的に言えば、人口増加による分業の発達が多様性をもたらし、分業による余裕の存在や多様な人々間のコミュニケーションの頻繁化、競争の促進によって多くの知識が生み出される。経済の面から見れば人口増加による分業の発達や知識の増加は経済を発展させるため、人口増加はマルサス的な経済発展の制約要因ではなくむしろ経済発展の要因となる。

### (3) 階級と民族の周流要因としての人口

高田は出生率を左右するものはやはり力の欲望であり、自分の子どもに対しても高い教育と生活の安定を望むため出産を慎重にさせるとする。力の欲望による人口の減少は社会が「利益社会」へと移行していくことで一層進んでいく。高田の社会学理論によれば社会は地縁や血縁によって成立する基礎社会（国家、地方団体、氏族、部族など）と地縁や血縁によらず「類似と利益の共通との何れかを根本の紐帯とする所の社会」である派生社会（宗教団体や株式会社など様々な団体）とに分かれる（高田1923a：186）が、国家を含めた基礎社会は派生社会が拡大していくに従ってそれに吸収され「衰耗」していく（高田1923a：378-396）。

一方、派生社会は人口密度が高まり相互の派生社会同士が交錯するにつれて社会の成員が接触する回数は多くなるが、同時に特定の人間との密接な関係は減少するため、派生社会は「個人そのものが目的であつて社会は此目的に対する手段に過ぎぬ」社会、つまり利益社会（Gesellschaft, société）（高田1923a：395）へと移行していく。

社会が個人主義的な利益社会化していくのは必然の趨勢であるが、特に上層階級は多くの富力を持ち利益社会化が下層階級と比べて早く進む。高田は「階級の周流」は上層階級が下層階級に移行するのではなく「上級の人々が滅び亡はれゆくこと」「上位にある階級の成分の人口減少の事実、もしくは家族絶滅の事実」により起きるとする（高田1923b：222-223）。上層階級は自分の生活を豊かにし子どもにも豊かな生活を送らせようとするため「自己の現在の地位をば数多の児孫を育つことによりて危殆に陥らしめむともせず、他方にては数多の児孫を育てて彼等の各をして自己等よりも苦しき生活に入らしめむと願はず」、子どもの数を制限しようとする（高田1923b：245-246）。

一方で下層階級は社会の最下位にあり地位や体

面を顧みる必要がないため子どもを減らすことを考えない。人口の増加は文化的・経済的発展をもたらす一方で人口減少はその逆に衰退をもたらすため、人口が減少し衰退する上層階級と人口が増加し発展する下層階級との間ではやがて階級の逆転が起き、「階級の周流」が実現する。高田は特に利益社会化が進んだ都市部と利益社会化が遅れた農村部を対比させ、都市と農村との格差を重視し、都市と農村との間での「階級の周流」があると想定する。

こうした階級周流論と、利益社会の西洋では人口が減少し利益社会以前の日本では人口が増加しているという認識とが結びつき、「人口が減少し衰退する上層階級」と「人口が増加し発展する下層階級」との関係を西洋と日本との関係に当てはめることで高田は「民族周流論」を主張するようになる。高田は1919年のパリ講和会議で日本代表が2月に人種的差別撤廃提案を提出し、4月に否決されたこと民族問題に関心を抱き、日本の利益社会化を遅らせて人口増加率を維持し、それにより「民族周流」を実現することを主張する。

国内の下層階級も、国際的な下層階級の日本も、利益社会化の遅れは逆に人口増加により発展をもたらし、利益社会化が進み人口が減少し衰退する上層階級／西洋諸国との「周流」をもたらす。それゆえ当時問題となっていた日本の「過剰人口」は高田にとっては問題どころかむしろ好ましいものであり、高田は旧約聖書の言葉を用いて「産めよ殖えよ」と主張した（高田1927）。

## 第3節 高田保馬の政策論

### (1) 農業政策

高田は昭和初期における農村の疲弊問題について、その原因を農村の自給性の喪失、さらに根本原因として農村住民が都市の風俗を模倣して「なるだけさつぱりとした都らしいものを用ひようとする」が収入以上の消費をもたらしていることであると（高田1929：90）、疲弊した農村を救うためには「出来るだけ都会の品物を買はぬやうにすること」「自家用でない品物でも、できるだけつくること」「工業的な副業をすゝめること」「農民に算盤を弾くことを教へること」が必要であるとする（高田1929：101-105）。

人間には模倣する本能があるのでそのままでは「見え」によって収入以上の消費が行われ農村は生活難に陥るが、農村共同体を破壊しない程度に農民が合理的になれば、「見え」の消費はなくな

り収入を増やしたり消費を抑えたりする努力が行われ、農村の苦境も救われるとするのが高田の考えであった。

## (2) 経済政策

高田は大正後期の日本経済の停滞の原因の一つとして、第一次大戦における好景気により生活水準が上がったことが輸入の増加につながり貿易赤字をもたらしていることを挙げている。一方、人口が自然に増加していくことで「消費過剰」の国民生活はいつまでも続けられなくなり、自然に国民の生活水準が低下する。そして生活の質素化により貿易赤字の解消、過剰消費の解消による資本蓄積も可能になるとして、人口増と生活の質素化が現実の経済問題を解決する面からも好ましいと主張した(高田1927:152-156)。こうした「過剰消費」を批判し資本蓄積の重要性を説く主張は昭和初期の金解禁論争でも浜口雄幸首相が行い、緊縮政策を正当化している。

第一次世界大戦後は日本でも貧富の格差など社会問題が注目されるようになるが、高田は社会問題を解消する方策として「無産者の地位を引き上げる」ことで「へだたり」を小さくすることには批判的であった。高田は1920年代のイギリスで労働党が政権を握り労働者保護の政策がとられたことで「政府の財政は圧迫せられ、他の事情によつて既に成立してゐる赤字はこれが為に著しく増加した」。また「無産者の勢力の加はるにつれて労働銀の低落はくひ止められ」、「英吉利の産業は遂に国際競争の場裏に於て、漸次他から排除せられざるを得ざる勢いにある」。結局、金本位制離脱にまで至ったイギリス経済の凋落の原因は社会問題の解決策を「下の方を上を引き上げる仕方」で行ったことであるとする。ここから高田は社会問題解決の「積極の方針」つまり下層階級の生活水準を引上げることは「国家乃至民族を対外的に不利の地位に陥らしむる」ため、「消極の方針」つまり上層階級の生活水準を引き下げることが主張する。したがって「国民のすべてが貧しさを忍ぶところを目ざして、増税が不断に行はるべき」であり、「国民皆貧の目標への進行」が政治を通して行われなければならない(高田1934:94)。

現在の視点からは、国際競争力の観点から低賃金が必要であるという主張はある程度納得できるが、国民がすべて低い生活水準しか許されず、しかも増税が行われるのであれば、国内の購買力を著しく減少させ景気を悪化させるのではないかと

いう疑問が生じる。しかし高田は増税がむしろ景気対策になることを主張する。高田は資本主義社会では労働賃金の切り下げによる消費減少と資本蓄積による生産増大との不調和によって恐慌や不景気が生じるとする。これを避けるためには「資本蓄積の勢をじやまして抑圧するか。購買力を増加するか、此二つよりない」。購買力の増加は公債発行や中央銀行による政府への貸付などによって行われ、資本蓄積を抑えるためには「増税、ことに資本家によつて負担さるゝ性質の増税」が必要であるとした。

高田は「資本家蓄積部分が増税によつて政府の収入となれば、それは直接に商品の購買力として、又は給料を通して間接に、購買力として作用するであらう」として、増税を通じた政府支出の増大が購買力となることを主張した(高田1934:276-277)。これは現在のマクロ経済学の初歩で習う「政府部門が存在し、政府支出増大を増税で賄う場合の乗数効果」とほぼ同じものといえる。「放任さるゝならば蓄積さるゝはずで、あつたらうところの利潤」がありこれが購買力として用いられないのであれば、政府がこれを税収として吸収し「強制的に購買力にむけ直す外はない」(高田1934:280)。政府が特に資本家の利潤に課税し、それを使って支出を行うことで直接または間接的に労働賃金への支出が行われ、また消費財への支出が資本財需要にも波及していくことで政府支出以上の景気への波及効果(現代でいう乗数効果)が実現されることになる。高田はケインズの『一般理論』(1936年)が出た後、乗数の概念に注目し自身の経済学の教科書でも詳しく説明している(高田1941:389-392)。

## (3) 人口政策・国土政策

高田の理論からは人口は増えた方が望ましい。では人口を増やしていくにはどうすればよいのか。

高田は1921年にカーネギー平和財団から日本の徴兵制度に関する調査依頼を受けた京大経済学部の小川郷太郎の報告書を事実上執筆し、その際に農村は都市と比べて早婚であり、また農村の方が男性が徴兵される率が高いことを指摘している。農村部の方が早婚であり兵役義務年齢で結婚している割合が高く、かつ実際に徴兵されている割合が高いため、徴兵により出生率が大きく減少するのは農村部であることになる(Ogawa and Takata 1921)。徴兵制度を離れて一般化すれば、こうした事実は農村からの若年層の人口流出

により日本全体の出生率が減少することを意味する。

第一次大戦後から昭和初期において深刻化した農村の疲弊は、出生率の低下を引き起こすという点からも高田にとって望ましいものではなかった。それゆえ高田は低い生活水準に甘んじている農民の生活を安定させるため「都会から農村へ、別して都会の資本家から農村への不断なる輸血」が必要であり、「これのみが農村を救ふ道であると共に、それは高き階級の地位を切下げることによつてのみ十分に行はれうる。」(高田1934:93)として「国民皆貧」を訴えていく。

一方、昭和恐慌を経て高橋財政期に入ると農村が依然として停滞する一方で重工業が発展し、農村から都市への人口集中が進んでいく。特に日中戦争勃発後はその傾向が進み、第二次産業に従事する人口の割合は1930年の20.8%、1935年の21.2%から1940年には26%と急速に拡大した。1936年から1940年にかけての第二次産業人口の増加が169万人、うち製造業部門の増加は140万人であったのに対し、同時期に第一次産業人口は71万人減少した(高岡2011、129)。

当時急速に進行しつつあった工業化とそれに伴う人口の都市集中は、これまで人口増殖を支えてきた農村人口の縮小を通じて人口増殖力の減退を招き、人口減少は民族の危機を招くと広く考えられるようになる。そして工業化とそれに伴う人口の都市集中が加速化する中で、人口を増加させていくために重視されたのが、高い人口増殖率を持つ農村における人口の維持と、人口の適切な配置を進めていくための国土計画であった。大正後期から「日本は過剰人口を抱えている」という認識が日本社会では一般的であったが、社会の急速な都市化とそれに伴う人口減少への危機感は、高田のこれまでの主張を一気に社会の主流の思想に押し上げる。大正期から一貫して人口の減少を問題とし、都市と農村との格差を問題にし続けてきた高田に、いわば時代の方が追いついた形になる。

高田は当時の日本における生産力拡充政策により農村人口の比率の低下が起き、それが総人口の減少につながることに強い懸念を示し、強力な国家権力により農村人口を維持していくことを訴える。そして高田は大都市への集中を防ぎ各地域の人口配分を維持していくための国土計画の重要性を強調した。高田は1941年に政府の支援で設立された「国土計画研究所」の理事長に就任し、同年12月の同研究所主催の国土計画研究会で行った講

演で、日本の各部分がある程度まで「自給従つて自存の範囲、いはゞ環節的存在であることを必要と」すると主張した。

この環節として例へば日本全体を、八或は十といふ位な各環節に分割しますと、各環節が例へば人口八百万乃至一千二百万といふものを保有します。さうしてその各部分の中心に人口百万以上の大都市を持ちますが、その周囲にまた若干の分散せる中小都市をもち、これらと周囲の村落との間に人口の交流を行ふ、ことに農村からの人口吸収を行ふことにします。さうして適當なる位置にこの環節によつて指示せられ、又環節を支持するに足るところの産業殊に軍需産業を保有します。その結果各都市は之を養ふに足るべき食糧の給源地としての農村を持ち、吸収すべき人口の給源としての農村をもつ、それと共に農村はその生産物の需要者、人口の移動先としての都市をもつことになりませう。かういふことが一方消極的に非常時の防衛を安固にする所以であるとともに、過大都市の形成を抑圧し、ひいては国内に農村的なるものを前面に互つて一層強く保存することが出来ると思はれます。(高田1942:15-16)

都市への人口集中がさらに問題になった戦後も同様の国土計画論は何度も提唱されている。1977年に閣議決定された第三次全国総合開発計画(三全総)では人間と自然との調和のとれた人間居住の総合的環境を整備することが目標とされ大都市の過密を抑制するために日本を複数の定住圏に分けて整備していくことが掲げられていた。高田の人口適正配置論と戦中・戦後の国土計画との相互関係は今後より詳細に検討する必要があると思われる。

#### 第4節 おわりに

高田の自身の理論に基づく主張は、特に昭和初期以降は当時の日本の国策と共鳴するものとなり、総力戦体制に伴う国策を支持する役割を果たしたことは否定できない。ただそれは高田が現実の社会の動向に無知であったためというよりも、むしろ現実に生じていた人口に関わる様々な問題を十分知りつつ、それを自身の理論を用いて主張や政策への関与により解決しようとした結果であったと考えられる。

高田の思想を体系的に理解するための今後の課

題としては、高田の理論的な研究の分析のみならず、相互に関係している貧困論・人口論・民族論・農村政策論・国土計画論などの政策論の分析、そして国策研究機関や政治家との関係を通じた実際の政策との関係を明らかにしていくことが必要となるだろう。

#### 参考文献

- Ogawa, G. Y, Takata, (1921). *Conscription System in Japan*. New York, Oxford University Press.
- 高岡裕之 (2011) 『総力戦体制と「福祉国家」——戦時期日本の「社会改革」構想』岩波書店
- 高田保馬 (1923a) 『社会学概論〔改訂版〕』岩波書店
- (1923b) 『階級考』聚英閣
- (1927) 『人口と貧乏』日本評論社
- (1929) 『社会雑記』日本評論社
- (1934) 『貧者必勝』千倉書房
- (1941) 『第二経済学概論』日本評論社
- (1942) 「国土計画について」『国土計画』1:3-22
- 牧野邦昭 (2011) 「高田保馬の貧困論——貧乏・人口・民族」『経済思想のなかの貧困・福祉——近現代の日英における「経世済民」論』小峯敦編、ミネルヴァ書房
- 牧野邦昭 (2012) 「高田保馬の人口論：人口理論、農村政策、国土計画」『マルサス学会年報』21:1-21
- 牧野邦昭 (2018) 「高田保馬の農業論」『摂南経済研究』9(1・2):93-106 (吉野浩司・牧野邦昭編 (2022) 『高田保馬自伝「私の追憶」』佐賀新聞社に収録)

## 第4章 今日の少子化から見詰める高田の人口論 —マルサスの人口論と比較して

柳田芳伸

(長崎県立大学名誉教授、経済学博士[京都大学])

### 第1節 講演の趣意

高田は1904年(20歳直前)に書いた「わが牢獄観」の中で、社会主義的な見方からマルサスが説いた生存資料の増加とは異なる級数の人口増加からの「弱肉強食」や、あるいは「自由競争」からの帰結である「階級の懸隔」を「不具の成長」と呼んでいた<sup>1</sup>。これは、高田が02年以降にはマルサスの『人口論』をも抜き読みしながら<sup>2</sup>、早期から貧民問題への義憤を募らせていたことを物語っている<sup>3</sup>。高田がその際に座右に置いていたのはアシュレー(Willam James Ashley, 1860-1927)が『人口論』の初版(1798年)並びに2版(1803年)から適宜に抜出、編集した簡約書(1895年)で、数年後に三上正毅訳『マルサス氏人口論』(日進堂書店、1910年)として邦訳書となったものではあるけれども、人口原理の原型を示してはいた。後年に、高田は「マルサス人口法則については1915-6年以来、年期を入れている」と述懐しているように〔吉野浩司・牧野邦昭編『高田保馬自伝「私の追憶」』(佐賀新聞社、2022年)155頁、以下では、単に『自伝』と略記)、京都帝国大学法科大学『経済論叢：まるさす生誕百五十年記念号』2巻5号(1916年)の刊行時の頃に至って、高田は『人口論』の各版(最終版の6版は1826年刊)の間にある多大な異同を実感されたものと推し量れうる。

「しかし、マルサスの人口法則の詳細なる吟味、その数多き批評の分析、それは今私が目ざしている仕事ではない。私はその根本の命題から、私の立論に出発点を捉えるために、マルサスの名を掲げ出して来たのである。人口は幾何級数に於いて増加すると云い、人口の増加は食物の増加に及ばずと云う。この場合に於ける人口の増加は何

物を意味するか。」〔高田『人口と貧乏』(日本評論社、1927年11月)170頁]、高田はこうはっきりと公言している。それゆえに、高田の側からすれば、本副題などは鼻からの見当外れで、迷惑千万以外の何物でもないことになるのかもしれない。しかしながら、高田が再三再四「生活標準」という言葉を配しながら、自説を展開しているのも事実である。もし高田がマルサスの2版『人口論』以降の各版に明示されている「貧窮の標準(standard of wretchedness)」や、『経済学原理』(1820年)に見定められる「愉楽の標準(standard of comfort)」に着目して、その議論を組み立てていたとしたなら、それはどのように帰着する可能性があったのか、大変興味湧く。また併せて、高田の人口論は今日私たちが直面している少子化社会の先行きにどのような指針を差し出してくれるのか、この場を借りて考えてみたい。

### 第2節 時論としてみた高田の「産めよ殖えよ」論

何よりも高田の人口論を高名にし、流布させたのは「産めよ殖えよ」の提言である。例えば、『経済往来』誌(1926年8月号)に寄稿された「高田の随筆『産めよ殖えよ』とそれに対する河上肇の批判は、多数の論客を動員する大論争に発展し、日本の過剰人口問題と高田人口論は一躍論壇の焦点に押し上げられた<sup>4</sup>と振り返られている<sup>5</sup>。高田自身もこの出来事を、「郷里の田舎町を歩く1人の乞食を見て生活程度を工夫すると生きる道があろうと考えた。それをきっかけに『産めよ殖えよ』という随筆を書いた。これが河上博士…に取り上げられた。…学問的のものであった。私もあくまでも学問の本筋に立って応酬した。これは後に、那須皓、永井亨、向坂逸郎諸氏の参加をえて、若干注目をひいたらしい。…『産めよ殖えよ』には苦い感情を味わった。『旧約聖書』…には『産めよ殖えよ』とあるはずである。…河上博士の批判を読んでから、2年近くたっていたであろう。今から考えると講義案も曲りなりにまとめた。少

<sup>1</sup> 田中和男「高田保馬の青春」『社会科学』第92号(同志社大学、2011年)9頁。その際に、高田はワット(James Watt, 1736-1819)や蒸気機関を利用した工場にも触れている。

<sup>2</sup> 高田「高田保馬博士年譜」『経済論叢』58-1・2(1944年)362頁、『高田保馬博士の生涯と学説』(創文社、1981年)487頁。

<sup>3</sup> 高田保馬『マルクス貧困論考』(甲文社、1950年)序1頁、高田保馬博士顕彰会『高田保馬』(2004年)97-102頁、及び『自伝』7頁。

<sup>4</sup> 中西泰之「高田保馬の人口論理論と社会学」『経済論叢』140巻5・6号(京都大学経済学会、1987年)初出、ここでは金子勇編著『高田保馬リカバリー』(ミネルヴァ書房、2003年)110-1頁を参看。

<sup>5</sup> 「産めよ殖えよ」の人口論争については、南亮三郎『人口論発展史』(三省堂、1936年)2章で詳述されている。

しは他の問題を考えるゆとりもできた。…往年夢のごとしとはいうものの、当夜の光景は忘れがたい。』『自伝』155-6頁)と回想している。この一齣は優に瞥見するに値しよう。

さて、『人口と貧乏』には、高田の筆になる該当(ここで必要な)論文がすべて収録されている。すなわち、当該の「産めよ殖えよ」90-5頁、「人口問題私見」〔27年6月29日に福岡において講演した内容に訂正を加え、27年8月上旬に『福岡日日新聞(現・西日本新聞)』に寄稿した論〕96-129頁、「人口はどうか」〔『経済往来』(1927年9月号)に掲載〕130-67頁、及び「人口問題の反批判(後に、『人口と貧困—河上博士への反批判』と改題)」〔『改造』9-9・10号(27年9・10月)〕168-260頁である。本節の以下では、断らない限り、旧字体を新字体に置き換えて(但し、平仮名はそのまま)、同書の頁数によって引用個所を示すこととする。

端緒として、高田をして「私は現在の学界思想界の異端者」(97頁)と言わしめた「産めよ殖えよ」論をかいつまむことから始めたい。高田は多数の論者が唱える人口増加からの貧困の説明に異を唱える。曰く、むしろ、「真の問題は来るべき出生率の減少」であり、とりわけ「既に大都市の知識階級に押よせて来つつある」(91頁)ところの「産児の制限」(93頁、また4頁も参照)や「出生制限」(94頁)の方が緊迫せる問題なのである。「人口の停止—これは弱い、不利の地位にある民族にとりては最大の危険である」(93頁)り、「有色人民族自滅の時」(95頁)に外ならないのであって、「ただ産めよ殖えよ、…殖えさへすれば、そしてこれに応じてすべての文化的活動ことに経済的活動が盛んになれば、国内はなお一層多数の人口を養い得る余地がある」(94頁)と訴える。食生活を例にとれば、「一朝有事の日のためにはバレイショとサツマイモとは〔主食の白米に比べて、164、216-9、237頁〕優に今日よりも数倍の人口を養ふに足るもの」(96頁、亀甲内引用者)で、「地球上の人口が極限に達するまでには、日本の人口密度はなお5倍、10倍になるであろう」(92頁)と推算している。このように見立てた上で、「今日の生活難」の真因は実は「戦乱〔第1次大戦1914-8

年、ちなみに、日本の軍隊はミクロネシア群島を支配し、中国にあったドイツの租借地・山東半島を占領し、またシベリアにも出兵した〕時に於ける生活水準の異常なる上昇」(92頁、亀甲内引用者)であり、問われるべきは「一定の体面が保てない」、「一定の虚栄」が張れない(93頁)といった国民の「生活費の不相応に高き」ことや、あるいは「国民の努力乏しき」ことにあると断じていく(94頁)。

この論は忽ち数多の反論を巻き起こした〔杉原四郎「河上肇と人口問題」『経済論集』32-4(関西大学経済学会、1982年)28頁〕。その代表格が河上肇「生活難の事実を言葉の上で避妊することにより之〔人口過剰〕を解決せんとする、高田、気賀<sup>6</sup>博士意見=資本主義弁護論の現象形態の1つとしての僧侶的扮装(人口問題批判捨遣の2<sup>7</sup>)」であり、翌年には『人口問題批判』(叢文社、初版27年2月)として収録された1論である。但し、河上の側から判した鈴木、高田、及び気賀の所論に対する見方は、杉原前掲論文34頁に委ねることとしたい。

一転して、高田の言を引くなら、「可なりな曲解の上に立っている(と少なくとも私は考えるが)同〔河上〕博士の批判を論駁するだけのことはそうまで考えをねる必要もなく学問的にも意義が乏しい。」(168頁、亀甲内引用者)と表白され、たとえ反批判を呈したとしても、「空疎なる議論」(260頁)に終始してしまわないかと懸念する羽目になる。しかし実際には論駁されている。例えば、11年4月に公表した「現在文明の迷妄生産政策の否定」〔『社会学的研究』(宝文館、1918年)357-76頁に収録、例えば、その374-6頁の記述〕において、既に、社会の「生産力が殖えたからといって何われ、決して我々の生活といふものは楽になるのではない。成程、労働者の生活は幾らか高まって参るかも知れないけれども、更に此高い階級の人の生活はウント贅沢になって居る、それであるからその間のへだたりが顕著である限り、我々の苦しみは殖えるものであるといふことを書いている」〔『人口と貧乏』117-8頁、また同書209、238-9頁や、『マルクス貧困論考』序1頁も参照〕にもかかわらず、「私は此の資本家的組織

<sup>6</sup> 気賀勘重(かんじゅう、1873-1944)のことで、当該論文は「現代病生活難」『経済往来』26年8月号である。

<sup>7</sup> ちなみに、この1とは『経済往来』26年8月号に寄せた「鈴木文治(1885-1946)の人口制限論に対して」〔『社会問題研究』74冊26年8月〕である。

が行きつもらぬとは考えてゐない。…私の数多き著書…に恐らく目を通さずして、僅かに2頁の随筆からのみ曲解(私の敢て曲解と云ふ)すると云ふことは、果して学究の議論に対する批判として許し得べきものであるか(226頁、また235頁も参照)と概嘆を洩らしている。また併せて、高田は再三にわたって、「私は現在の資本家的組織を如何にすべきかといふ点について、自分は何等かの考へがないわけではない。併しながらそれは学究としての私が立ち入る範囲ではないと思っている。…之を資本家弁護論といふのは途方もない見当違いの解釈であ」(116頁)ると繰り返して(87、133、226、233-6、241頁を参照)、「知らず、河上博士は虚心坦懐、なほ、これを以て、私見を資本家的生産の弁護論なりと云ひなす為の曲解に非ずと断言せらるる勇氣ありや」(234頁)と投げ返している。つまり、高田の持論では、あくまでも「分配係数の根本的なる変化はむしろ権力分配の変更から来り、権力の分配は他の方面の事情から来る」(193頁)のであるので、「分配係数は資本主義的社會に於ても、他の社會組織に於けると等しく、一定の範囲の内を多少とも変動する」(201-2頁)ものの(184頁も参照)、差し当たっては、「与えられたる資本主義的の經濟組織〔社會組織〕」(105、115、116、179、198-200頁)、あるいは「現在の私有財産制度」(133頁)が議論の前提とされているのである。この帰趨として、「マルクスの人口法則の骨子をなす…分配係数の変化」(203頁)は一旦論外へと放逐される。

一方で、高田は「人口問題に関する河上博士の根本的立場は全然マルクスの資本家的社會の人口法則である。従ひて博士特有の人口法則はなく、マルクス人口法則が現代の日本の人口問題にあてはめられてあるのを見るだけである」(246-7頁、また143頁も参照)と集約している。その上で、もしそうならば、「どこに理論の厳格さがあるか、その主義的立場の為にする論理の飛躍以外、そこに何物があるか」(226頁)と論難、指弾する。人口増加に「生活難の原因」との「濡衣」を着せられた現況を心底より憂い(98頁)、「私の意図が主に政治家の人口問題対策の内在的批判にある限り」(233頁)、「資本家的社會の人口法則」の解明でなければならないと詰めていく。この点に絞り込むなら、高田はおよそオッペンハイマー(Franz Oppenheimer, 1864-1943)による技術進歩に伴う収獲遞増論や労働補償説を根拠にして『人口と貧乏』185、191、198頁、なおこの摂取に際して

も高田は十分過ぎる慎重を期している、「私の人口論—那須博士の批評に答へて—(28年9月)『マルクス貧困論考』189、219頁や、同書53、56、59、84頁を参照)、「マルクスの人口法則」は「資本家的社會の成長期の人口法則」にとどまるものであっても、資本家的「社會の爛熟期を支配する法則」(210頁)あるいは「資本家的生産後期に於ける人口法則」(147、148頁)ではないと喝破している次第となる。加えて、海外移植民については、「今日に及んでなほ、海外に於ける同胞の人口は70万人又は百万人を出ていない状態」(99頁、また94、220頁も参照)と通観したり(183頁)、あるいはまた「商工業の急激なる隆盛」に関しても、残存している「封建制度」(153頁)によって「國民の生産能率が低く、国内に資源が乏しい」ゆえに「輸入超過」に陥っていて、「頗る困難」であろうと推測したりしている(100、220-1頁、また231頁も参照、かつより詳細には136-7、141-2、150-8頁を参着)。

ようやくにして、「産めよ殖えよ」論に付随しているであろう条件設定や露払い作業は片付け終えたであろうか。次いで、こうした上で、「全社會學組織の1の系論に過ぎぬ」(244頁)と謙遜しながらも、「欲望發展の理論」(103頁)あるいは「社會進化の根本理論」(243頁)に根差した「欲望に関する余の社會學說」(88頁)に立脚して構築したと銘打っている「生活難乃至貧乏の理論」(244頁)の内実に迫っていこう。

これを何よりも如実に示しているのが高田自らの手によって打ち出されたとされる「人口方程式」、すなわち「生活標準〔S〕×人口〔B〕=分配係数〔d〕×生産力〔P〕」であると概括できる(159、181-2頁)。既述したように、これらの4つの変数の内、「分配係数は議論の仮定として之を動かさぬ約束が設けてある」(159頁、また192頁も参照)。したがって、「人口、生産力、生活標準と云う3者の相互作用」(190頁)に絞られる。高田はこれをまず次のように論証していく。抜粋してみよう。「均衡破壊の運動は第1に、人口の側より起こる。…大体に於いて、人口は増加の傾向を有すると云い得る…人口の増加がよし徐徐であるにせよ、徐々にでないにせよ、連続して一定の期間に亙るとする。現在の生活標準を維持しつつ、増加した人口が生存すると云うことは、漸次困難とならざるを得ぬ。…生活標準も〔俄かには〕…変更され難い。其結果として、此人口増加の圧迫は先づ、而して最も強く生産力の上に加はる」(183-4

頁、亀甲内引用者)と。高田はさらに続ける、「人口の増加がその圧力を生産力の上に加ふるとき、その結果は生産力の断続的非連続的增加となりて現れる。…〔時として〕人口の増加に伴ひ得ざる場合が生ずる。此際人口増加の圧力により生産力の側に生ずる変化は技術の変更による飛躍的增加である。…かくて生産力の増加は増加したる人口を十分に支持し得るに至るのみならず、多くの場合顕著なる余剰をすら生ずる。此余剰は生活標準率Sを高める…かくて人口増加の圧力は生産力の増加を通じて、生活標準の上昇という意外の結果を有するに至る」(186頁、亀甲内引用者)と。

そして究極、以下のように自問自答しつつ、論結していく。すなわち、「1たび上昇したる生活標準が低下することによりて新たなる均衡が成立せざるか。此生活標準は決して単純に生命の維持に必要な物資の数量によりて決定せらるるものではない。私の用語を以てすれば、力の欲望がすべての階級に亘りて作用する。最低き階級にとりては…寧ろ上位の階級の生活内容に対する追従の要求、同化の要求として作用する。…〔生活標準〕を引き上げむとする力の欲望の作用が普遍的であるが為に、1たび高められた現在の水面に到達してあるところの生活標準の程度は、決して自発的に低下することはない。特定の生活標準は…その充足が習慣的となるほど、生命維持の要求の仮面を被る。従ひて既に充足せしめつつある力の欲望の充足を奪うことは生命の維持に対する圧迫として反抗せられる。此の如くにして、高まれる生活標準は容易に低下することはない。…力の欲望は作用して、〔生産力の飛躍的增加による〕余地の存する限り、其生活内容を高め上げる。…かくして標準は高まるまで高まり行く。人口の増加のために取り残される余地はやがて消滅する」(187-9頁、亀甲内引用者、また106-7、191-2頁も参照)と。

こうした筋道を念頭に置くなら、高田が「大戦当時収入の増加に応じて急に高め上げられたる生活標準は容易に下げられ」(153頁)ないとはいえ、「一朝必要がある時世の中の多くの人間の生活程度を幾らか下げることによって、更に多くを養っ

ていく」(109頁)緊要性を提起しているのも肯ける。不条理ではなかろう。また、その際的生活標準が「無産者、又は最低階級の場合にあっては、ただ力の欲望をみたすための消費財を意味するが、他の階級の場合にあっては必ずしもさうではない。自己の社会的体面を維持すると共に、増加してゆく人口(事実に於いては各自の児孫)をして此体面を維持せしむるが為に、新たに獲得することを要するだけの財、もしくはその価額を意味する。若し生活標準と云う言葉が、これらのものを併せ意味せしむるに不都合であるならば、それを例へば、標準的生活要求とも云ひかふべきであろう」〔私の人口論(28年9月)〕208-9頁〕と補足しているのも首肯できはしよう(178-9頁)。

しかし再論するまでもなく、他方では、高田が産児制限あるいは出生制限に関して、「国家又は国民、民族と云ふ全体の立場に立つ限り、之を主張しがたい」(131頁、また196-7頁も参照)と断言し、かつこれによつては「完全に今日の人口問題、乃至生活問題を解決するといふことは、不可能」(103頁)であると見なしていたのも歴然たる事実である(221、241頁、また22-5頁も参照)。また同様に、高田が自論をもって「人口問題に対する放任論」(167頁)、あるいは「人口放任論」〔私の人口論〕219頁〕と命名、豪語してやまなかつたのも然りであろう。高田はこれらにとどまらず、人口史観<sup>8</sup>に立ち、「其根本的なものは人口の自動的增加である。…人口増加の結果として、社会組織の姿が決定せられ、此社会組織に決定せられて成立したる体面の為の競争が生産力を増加せしめ、一方は此増加、他方は社会組織によつて定まれる分配係数の共同作用によつて低き階級に与へらるる生産物総量が定まる。此総量は生活標準の若干の向上を許しつつ、人口増加の限度をたえずかぎりつつある。生産力による人口増加の限度は人口自らの間接的な自己制限である。社会に於いて自己運動を営むものは人口の外にあり得ない。人口の自己運動、社会中心の歴史観、力の欲望に基づく社会発達観、社会的勢力による経済の被決定性、これら一団の知識乃至主張は、私見に於いては相連関して離しがたい一体を

<sup>8</sup> 『階級及第三史観』(改造社、1925年)、なお手短には、杉田菜穂「少子化問題と社会政策：ミュルダールと高田保馬」『人口・家族・生命と社会政策』(法律文化社、2010年)25-6頁や、牧野邦昭「高田保馬の貧困論」小峰敦編著『経済思想のなかの貧困・福祉』(ミネルヴァ書房、2011年)313-5頁、並びに同「高田保馬の人口論」『マルサス学会年報』21号(マルサス学会、2012年)6-9頁等を参照。

なしている。私の人口法則は私の社会的考察のただ一側面たるにすぎぬ。」「[人口に関する小論—向坂逸郎氏に答ふ—(33年1月)]『マルクス貧困論考』229-9頁]とさえ公言して憚らなかったのである。高田の「産めよ殖えよ」論の根幹は紛れもなくここに存していたと言えよう。

ただ、こうした高田の「人口方程式」の高遠な本義は筆者の消化能力を遥かに超えている。ここでは、ただこれを1時論として措定した場合、どうなるのかを垣間見るだけにとどめたい。例えば、当時の概況は次のように大観されている。すなわち、1918年(大正7年)に起きた米騒動「の頃を境にして、白米の国内自給率が低下した。都市人口の増加と白米食の普及が、米需要を増大させたにもかかわらず、戦間期の農業発展が製造業と比べて思わしくな[かった]…第1次大戦後の不況下で、都市労働者の生活上の防衛策として子供数の制限は現実的な課題になっていた。…合計特殊出生率[1人の女性が生涯に産む子供数]は、1925年の5.11から、1940年の4.11へ大きく低下した。…1927年、内閣に人口食糧問題調査会が設置され、米増産計画が強調された。…[それに1930年代には]大量の[農業]移民が満州[中国北東部]に向けて送り出されていった。…[第1次大戦期の]日本は空前の好景気となり、経済は大きく発展した。繊維産業だけでなく、造船・製鉄業といった重工業が飛躍的に発展した。後進産業であった化学工業も…ドイツとの交戦によって自国による生産が必要とされて、一気に近代化が進んだ。…しかし第1次大戦終結後、過剰な設備投資と在庫の滞留が原因となって反動不況が発生した。…[金輸出の再開時期を逸したために]政府・日銀ともに景気対策に失敗…関東大震災(1923年)によって京浜工業地帯が壊滅的な打撃[を受け]…景気回復の見通しがまったく立たないままに恐慌[1929年10月24日]を迎える[に至った]…戦間期は工場労働者の実質賃金が大きく上昇した時期である(ただし1930年代中頃からは低下が見られた)。また1920年以後、製造業労働者と農業、大企業労働者と伝統職人、大企業と一般の織布工の間で、賃金格差が大きく拡大した…格差の拡大は30年代前半まで続くが、その後[近代工業部門への労働需要の増加のお陰で]縮小した。…ジニ係数[0~1で示され、0では完全なる平

等、反対に1に近ければ近いほど格差が大であることを表し、通常0.5を超えると革命が生じてもやむをえないとされる]の推移では、40年まで格差は拡大し…最高値で0.57を[記録]…1900年から1938年までに、最も大きな割合を占める食料費の割合[エンゲル係数]が64.0%から49.0%まで下がった。…国民にも生活に余裕が出てきており、生活水準が上がっていることがわかる。…義務教育を終えて中等教育に就学する者の割合は増加途上にあるとはいえ、1925年に男女合計でも32%でしかなく[亀甲内引用者]だった<sup>9</sup>と。

高田は上記のような全容を論評し尽くしているわけではないけれども、その一端についてはこれを極めて的確に観察していよう。すなわち、第1次大戦は「国内物価の過度なる騰貴[「通過膨張景気」(156頁)とも換言している]、奢侈の風潮[例えば、「日本人の服装の洋風化」(151頁)や「賭博」(76頁)]、放漫な生活[例えば、低廉な食糧品や肥料の輸入の増加(151、216頁)]を誘致した、しかし「戦後に於て来るべき当然の緊縮生活は未だに徹底せぬ」(152頁、亀甲内引用者)、ましてや近時では金融恐慌が生じさえしている[『マルクス貧困論考』268-9頁]。こうした中で、「生活標準が下げにくいのに収入は減少の一方で…小商工業者の実情について見ると、この点が容易に看取せられる」(153頁)し、他方での「利子衣食者や俸給衣食者」の高収入は会社、銀行、政府機関による損失補填で穴埋めされている窮状にある、「国民全体をあげて消費超過の実行者となっている」(154頁)と言わざるを得ない、と。

さらに続けて、今日ではすっかりと「国民生活標準」(165頁)となっている「白米を主食としなければならぬと云ふ習慣」(164頁)を「国防の点」(216頁)から自給で満たそうとした場合、1人あたり年間1石7斗[成人男子では2石数斗]で算出される(165-6頁、亀甲内引用者)。現行の耕地にあっては、「品種の改良と、肥料[燐・油粕]の量質配給に於ける改善と、他の耕作方法の変化」(217頁、亀甲内引用者)を施すと共に、並行して全国に散在している約200万町と見積られる「未耕地」(164頁)を開墾していく必要が生じる。そうだとするなら、「私見によれば、農業収益を高めるか、又は農民に対して何らかの保護を加ふるか、又は国民一般の生活標準の下降により

<sup>9</sup> 鬼頭宏『図説 人口で見る日本史』(PHP研究所、2007年)136-7頁。

て未耕地の耕作なほ生活を支へうるに及ぶならば、耕地は拡張せられ、既耕地の耕作は一層集約的となり、食糧は増加すると共に、所謂生活難はそれだけ緩和せられる。」(219頁、なおより詳細には、『自伝』251-3頁を参照)と結んでいる。つまり、高田の見立てでは、生活標準の「低下の対象とされていたのは富裕層や都市部の住民であり、人口の供給源となる農村部の住民については、国家が社会政策〔高田は失業保険、健康保険、救貧制度等を挙げている、例えば、「人口政策の缺乏(1935年6月)』『民族と経済』(有斐閣、1940年)64頁、並びに『マルクス貧困論考』264頁)を行い生活を安定させること〔牧野「高田保馬の人口論」13頁〕であったのである。かつその背後には、高率な出生率を現出させている農村部における「家族主義」(『人口と貧乏』259頁)への並々ならない期待があり、「1国全体の団結の基礎は何処にあるか…如何なる場合に於ても情誼的に団結の濃やかさは下層階級に於て見られる」〔「生活標準と人口問題(1934年8月、大阪中央公會堂講演録)」15頁、また『マルクス貧困論考』255頁や、杉田「少子化問題と社会政策」30頁も参照〕との確信があったのである。

### 第3節 高田の人口方程式とマルサス『人口論』との基本視角の異同

この裏返しとなるのか、高田は功利主義者を含めたイギリス古典派経済学者たちが個人主義的利益社会を解剖、究明せんとした知的成果には冷めた目で静観視しているように見える〔『自伝』112、170頁、功利主義に至っては、1便法としてのみ用いられているようにさえ拝察される(『人口と貧乏』78-84頁)〕。こうした中で、専ら理論的志向という研究視角に局限されていたものの、高田がマルサスの人口原理や、「否定したいと思ふ」と表白しているマルサスの「需要過少説」(『人口と貧乏』30頁)に視線を送っている点は一見するに値しよう〔「マルサスと近代景気論(1934年2月)』『経済と勢力』(日本評論社、1936年)所載119-38頁、並びに「マルサス没後百年紀年特別講義：マルサスの二つの理論」『苑経』8・9巻合併号(法政大学経済学部、1935年2月)〕。この内、まずは「需要過少説」の側面に照射するならば、高田は過少消費に不況因を見出す「マルサスの恐慌(理)論」をシスモンディのそれと共にセイの「販路の理論〔あるいは単に販路説〕」や「経済学の完成者と言われる所のデービッド・リカル

ド」〔「マルサスの二つの理論」23頁〕による生産過剰否定論に対する代表的な対抗理論として位置付け〔「マルサスと近代景気論」126頁〕、分析して、恐らくはケインズのマルサス評価に触発されてであろうけれども〔ちなみに、ケインズの『人物評伝』は1933年刊〕、「マルサスは多くの場合に、釣合、中庸を求めてゐる…消費の拡張に於て最も重要なものは、不生産的消費で…これらの不生産的消費者の消費を増加すること、別して国家が生産物を増加せしめざるが如き新事業(土木の如き)を起し、又之を有産者に奨励することを教えてゐる。」「マルサスと近代景気論」129-30頁〕と説く。しかしながら、クレマン・ジュグラアル以降、恐慌理論は「景気理論の中の一分肢」となっていて〔「マルサスと近代景気論」133頁、また120頁も参照〕、近代的景気理論としてみれば〔『自伝』117-8頁〕、マルサスの恐慌理論は「オーストリー学派のベーム・バヴェルク」が説く「生産の迂回」も、またハイエクが重要視している「資本と需要との間に介在する生産構造」も考察しておらず、マルサスは「第三のファクターを忘れてゐる」との論評を下している〔「マルサスの二つの理論」28-34頁〕。

では、高田はどうしてわざわざこうした欠陥を蔵するマルサスの恐慌理論を引き合いに出したのであろうか。それは、不十分であれ「迂回生産の程度」を視野に入れた「マルクスの拡張再生産の理論」が事実上「需要に対する生産過剰を中心として展開されてゐることは争いがたく、此大体の方向に於て、それは、マルサスと立場を同じく」〔「マルサスと近代景気論」136頁〕していたからであり、かつまた「マルクス人口法則の吟味を十分に仕遂げるのには、其景気論恐慌論に立入らなければならぬ」(『人口と貧乏』255-6頁)という予告を実行せんとしたからであったと推考される。とりわけ、後者の理由には引き寄せられる。というのも、ほぼ同じ時期〔1933年1月〕に、社会主義的な観点から高田は1度は論外へと放置した「社会的全生産物のうち、どれだけが無産者階級に与えられるかを示す」〔「人口に関する小論」227頁〕分配係数の変化を改めて俎上に挙げて、「資本主義後期に関する私の人口法則の論証」〔「人口に関する小論」212頁〕を試みているからである。

高田の所論にしたがうなら、「分配係数を決定するものはすべて社会的勢力関係である」〔「人口に関する小論」226頁〕、中でも「経済的勢力即ち富の分配」は経済的分配以外にも政治的分配によ

る再分配を通しても行われる〔「人口に関する小論」228頁〕。だから、「無産者の抵抗…に従って労銀の高さはちがひ得る」〔『マルクス貧困論考』29頁〕のは当然であるし、例えば、「無産運動の漸く力を加ふるにつれて、其経済的地位はいくらにても改善せらるる」し、「無産者の政権獲得によって富の分配の改変せらるる」のであり、マルクスはこの「生産物の政治的分配を忘れてい」と論を進めていく〔「人口に関する小論」227、237頁、また『マルクス貧困論考』263-6頁も参照〕。しかも、この「無産者の抵抗」は「ある程度まで、マルクス主義の力によって産み出されたる」ものであり、「社会組織を変革せしむるほどの力をもつところの勢力関係が…単なる受身の傍観者である」とは言い切れないとまで立論していく〔『マルクス貧困論考』267頁〕。つまり、高田の千里眼は、第1次大戦以降の日本のような「資本主義の後期に入りて」〔『人口と貧乏』144頁〕は、「個人解放という近代の運動」に後押しされた「マルクスの階級闘争の結果」として「社会政策的補助」分配が逐次累増されていき〔「人口政策について（1937年7月）」『民族と経済』（有斐閣、1940年）41頁〕、「国民所得又は純生産物のうちの何割又は何パーセントが労働人口に所得となるかを」示す分配係数が変化、好転していくと遠望していたのである〔『マルクス貧困論考』36-7、40頁、ただしこの章の執筆は1949年3月〕。

そればかりか、高田は「資本家的社会の人口法則を共産的社会の人口法則と比較することは興味ある事柄である。ただ共産的社会はその近代的形態に於てはまだ完全に確立せられず、従ひてその人口法則と云ふも、思想上の構成物に止まる。」〔『人口と貧乏』213頁〕と述べる一方で、資本家的社会の「爛熟期に於ては、生活標準の自動的上昇の為に、人口の〔個人的〕自己制限が営ま」わされると論及している<sup>10</sup>〔『人口と貧乏』213頁、亀甲内引用者、また「私の人口論」201-2、215頁

も参照〕。このことは、高田が1913年頃にミルの『経済学原理』を〔「社会主義的な考えをも」っていた近衛文磨の要望での〕講読する機会を有していたことを思い起こさせる〔『自伝』57頁、亀甲内引用者、また『回想記』（改造社1938年）111頁も参照〕。なんとすれば、ミルはそこで「人数の正当な（due）制限」に関する資本家的社会と共産的社会とを比較考量していて、資本家的社会の爛熟期に至っては、知的道徳的進歩を遂げた下層の人々が「必要に強いられて停止状態に入るはるか以前に、みずからすすんで停止状態に入ることを」希求すると述べているからである<sup>11</sup>。ただし、高田は共産的社会においては、人口増加に対する「法規の拘束が生じ、云はば、人口の社会的管理が成立する…企図としては生産力の大きさと現在の生活標準とによりて人口の管理又は調整が行われるに相違ない」〔『人口と貧乏』214頁〕と付け加えてもいる。言うなれば、共産的社会における「人口増加を制限するが如き社会的規範の構成」〔『人口と貧乏』191頁〕を求めているのである。

このような論旨の発想源は、エンゲルス（Friedrich Engels, 1820-95）がその『人口増加が社会の進歩に及ぼす影響』（1880年）の中で共産的社会における避妊の必要を説いたカウツキー（Karl Johann Kautsky, 1854-1938）に宛てた書簡（1881年2月1日付け）の一節に、すなわち、「人間の数が、その増加に制限を加えねばならないほど大きくなるという抽象的な可能性は確かにあります。しかし一度共産主義の社会が、それが物の生産を規制したと同様に人間の生産をも規制する必要に迫られるとすれば、まさにこの社会こそは、そしてこの社会のみが、それを困難なしに実行する社会でありましょう。」<sup>12</sup>に見出されるが、高田がこれに倣ったのか否かは推断し難い<sup>13</sup>。ともあれ、高田が広義の社会主義的な見地〔「社会民主主義」あるいは「修正派の社会主義者」〔「人種問題私見（1919年10月）」『現代社会の諸研

<sup>10</sup> ちなみに、高田はやがては規範となっていく人口の個人的制限を出生の人為的制限〔避妊〕と想定している〔「私の人口論」203、239頁、また『人口と貧乏』196-7頁や那須皓『人口食料問題』（日本評論社、1927年）206頁も参照〕。

<sup>11</sup> 『杉原四郎著作集Ⅱ』（藤原書店、2003年）60-1頁。

<sup>12</sup> R.L.ミーク編大島清・時永淑訳『マルクス=エンゲルス マルサス批判』（法政大学出版局、1959年）136-7頁。

<sup>13</sup> なお、高田はカウツキー〔『人口と貧乏』239頁、『マルクス貧困論考』16、35、101頁〕による資本主義社会観には極めて批判的であったこと〔『マルクス貧困論考』101頁〕から斟酌すれば、労働者による産児調節を無言の抵抗とは露も考えていなかったと言えよう（『人口と貧乏』100-101頁）。ちなみに、カウツキーが労働者による産児制限に実行を「人間的生の無言の抵抗と抗議」と解していた点については、拙論「カウツキーの人口論の導入者たち」八木・柳田編著『埋もれし近代日本の経済学者たち』（昭和堂、2018年）96頁を参照。

究』(岩波書店、1920年) 179頁、『マルクス貧困論考』35、49頁]への共鳴者であったと目したとしてもけっして的外れではなかろう。

正反対に、マルサスの方は典型的な反社会主義者の1人であった。それは間違いない。確かに、マルサスは初版『人口論』において「2つの基本法則、すなわち財産の安全と結婚〔一夫一婦〕の制度」(〔1〕149頁、亀甲内引用者)がないような平等社会は人口原理の作用によって程なく瓦解していくと確信、提唱し、ゴドウィンやコンドルセが平等社会になれば人間の理性化の限りない進歩によって「人口からの困窮(distress)」(〔1〕233頁)から解放されると楽観視しているのを「想像図」(〔1〕135頁)と一笑に付している<sup>14</sup>。それゆえ、当時の社会主義者たちの目には、例えば、「マルサスの『人口論』を容認することは…社会のあらゆる欠陥を人口法則に帰して、現存の社会秩序を墨守しようとするマルサス主義に、口実を与えることを意味していた。…マルサスこそ、社会の改革を妨げて反動に奉仕する労働者の敵であり、マルサス理論は、社会改革の理論とまったく相反する反動思想である」<sup>15</sup>と映じたのも無理からない。もちろん高田自身もこのマルサスによるゴドウィン批判を熟知していて〔「私の人口論」191頁、「マルサスと近代景気論」121頁、「マルサスの二つの理論」3頁、及び『マルクス貧困論考』11、13頁〕、わざわざ、「マルサスの人口法則は真の人口法則に非ず、ただ架空の推測に過ぎぬ」(『人口と貧乏』197頁)と揚言し、自らの人口方程式との相違を旗幟鮮明にしている。

にもかかわらず、この人口方程式に向けて、それは「決してマルサスを否定するものではなく、かへってマルサスの再生産であり、それを超えて一步の前進もない」<sup>16</sup>との無理解で辛辣な悪罵を浴びせられたのである。この論評に対しては、高田は真っ向から「文献的研究を中心とする其論文に於てかかる妄断をなすことは杜撰といふべきであろう…マルサスの学説に対する批評又は修正として此出生制限を最も重要視することは近代の人口学説の主潮流である。吉田氏はマルサス主義と

云ふ言葉の意味を解せられざるほどに此潮流に対して盲目なのであろう。マルサスの全文献のいづこに人為的出生制限の規範化をとける文句があるか」〔「人口に関する小論」(33年1月)239頁〕と手厳しく反駁したのである。間髪を入れず、吉田は勇猛果敢にもこの抗論に対して、「私はマルサスに関しては盲目であり…盲目に拘らず私は蛇の執念を真似て繰り返して云ふ。〔高田〕博士のマルサスに関する理解は依然として旧の如く、従って博士のマルサスは本物のマルサスとは似ても似つかぬものである」<sup>17</sup>とやり返したのである。篤学のマルサス研究者であった故・南亮三郎は、「この一連の顛末を吉田の批評は最も痛いところを衝いたものである…博士の説はマルサスからはどれほど隔ったものであるか、といふ根本問題は少なくともマルサスを真実に研究するものの等しく感ぜざるを得ないところである」<sup>18</sup>と評釈している。

いま吉田が小樽高商時代の南の教え子であったことを差し引いたとして、この寸評はいかなるものであったであろうか。なるほど、マルサスが初版『人口論』において頻出しているのは「人口〔の〕原理」〔ちなみに、高田は「人口の原則」と訳出している、『人口と貧乏』119頁〕という用語であって、「人口〔の〕法則」(〔1〕252頁)という語句の使用は1度きりである。それゆえ、この点に全神経をとがらせ、実に周到でかつ微細な析出を行った南<sup>19</sup>からみれば、高田によるマルサス理解など皮相極まりない類に映ったのであろう。

他方、上述したように、高田にとっては、「その根本の命題から、私の立論に出発点を捉えるために、マルサスの名を掲げ出して来た」に過ぎず、「予防的妨げ〔方法〕」(『人口と貧乏』191頁、「私の人口論」194頁)に属し、「晩婚」(『人口と貧乏』191頁)をその内実とした「道徳的抑制」(『人口と貧乏』169、191頁、「私の人口論」185-6、190、194、195頁、及び『マルクス貧困論考』13頁、なお、「私の人口論」194頁では、道徳的抑制の十分なる実行は困難であると解されてはいる)と慎慮的抑制との類別や、いわんやその仔細な吟味などは埒外の無用の長物であり、「マルサ斯的(な

<sup>14</sup> 伊藤久秋『マルサス人口論の研究』130-6頁。

<sup>15</sup> 吉田忠雄『社会主義と人口問題』(社会思想研究会出版部、1959年)178頁。

<sup>16</sup> 吉田秀夫「高田博士とマルサス」『新興科学の旗の下に』2巻7号(1929年7月)72頁。

<sup>17</sup> 吉田秀夫「高田博士とマルサス再論」『批判』4巻3号(1933年3月)65頁。

<sup>18</sup> 南『人口論発展史』45-6頁。

<sup>19</sup> 中西泰之『人口学と経済学』(日本経済評論社、1997年)2章。

る)人口法則』(『人口と貧乏』193, 194, 197頁)や「マルサスの命題」(『マルクス貧困論考』18頁)、ないしは「マルサスの立場」(『人口と貧乏』182頁)で十分に用足りたのである。要するに、高田が行論していく上で拝借したかったのは、「人口増加の傾向に関するマルサスの命題」(『私の人口論』188頁)であったのである。

この限りでは、ボナーから『人口論』を「何人も読まずして而も悪罵する」という文言<sup>20</sup>を援用しているように(『マルサスと近代景気論』123頁)、高田による人口原理の根本的な理解は正鵠を得ていよう。例えば、「マルサスの妨げざる人口の力(人口増加の傾向)と云ふものは其実甚だしく妨げられたる人口の力」(『私の人口論』204頁)と語っているように、抽象的な人口の増加力と現実の人口増加とを峻別しているし(『人口と貧乏』177, 191頁、「私の人口論」198, 204頁)、また「マルサスが眼中に置ける人口増加の実際の場合は大抵一夫一婦制度の行われてゐる社会である」(『私の人口論』198頁)と摘録し、一夫一婦制度が「すべての人間にとって自分自身の子供を扶養すべき明示あるいは暗黙の義務の制度」(〔1〕147頁)であることを把握してもいたと推し量れもする(『人口と貧乏』171-2頁、「私の人口論」199, 202頁)。

さらには、「文化の爛熟せる社会」(『人口と貧乏』195頁)におけるマルサス人口法則の一連の批判論を逐一紹介している。上述の収穫逓増を強調したオープンハイマーの『T.R.マルサスの人口法則と新しい国民経済学の人口法則』(1900年)を除いても、スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の『人口理論』(1852年)やダブルディ(Thomas Doubleday, 1790-1870)の『人口の真

の法則』(1841年)が文明の発達に伴う個体の知力や良好な栄養摂取によって生殖力や妊娠力を低下させていると説き、またブレンターノ(Luigi Brentano, 1844-1931)の『マルサス学説と最近数十年の人口動態』(1909年)やモムベルト(Paul Mombert, 1876-1938)の『ドイツ人口動態の研究』(1907年)が文化の発展の下での福祉の増大による性欲の減退を主張しているのを紹介し<sup>21</sup>、かつウォルフ(Julius Wolf, 1862-1937)の『出生減退論:現代における性生活の合理化』(1912年)が合理的理性意識に基づく避妊による「性交と生殖との分離」の促進を論じているのを略説している<sup>22</sup>。ただし、高田はコンラート(Johannes Conrad, 1839-1915)の『死亡率状態に関する職業〔終身職〕』(1877年)やプリンツィング(Friedrich Prinzing, 1859-1938)の『医学統計必携』(1906年)に依拠して「死亡率の増減が物資的福利の大小に依存すると云ふ死亡率減少に関する福利説は今日もはや支持しがたくなつてゐる」(『人口と貧乏』162頁)と論結している。つまり、ベルチヨン(Jacques Bertillon, 1851-1922)が『ドイツ人口動態の研究』等に依拠しながら『フランスの人口減退』(1911年)で主唱した「生死の平行法則」(『人口と貧乏』259頁)を退けて、「生死減少逆行の法則」を提起したと言い換えても支障ないであろう<sup>23</sup>。要は、高田はこれらの論客がもはや「資本主義文化そのものの結果として、出生制限〔マルサス主義〕の傾向は強まりつつある」(『マルクス貧困論考』259頁、亀甲内引用者)ことを巧みに解説し尽くしている<sup>24</sup>のを認知しておきたかったのである。

<sup>20</sup> ちなみに、ボナー著堀経夫・吉田秀夫訳『マルサスと彼の業績』(改造社、1930年)が刊行されていた〔同訳書5頁を参照〕。

<sup>21</sup> 高田もこの説明を「福利説」と呼称している〔「貧富と出生率(1916年5月)」『社会学的研究』(寶文館、1923年版)158, 162頁、『人口と貧乏』162頁〕。

<sup>22</sup> 「貧富と出生率」135, 140-5頁、150-1頁注23, 156-8, 162頁、「私の人口論」187-90頁、「マルサスの二つの理論」7-10頁、及び『マルクス貧困論考』9, 217頁。なお、これらの諸論の仔細については、差し当たり、美濃口時次郎『人口政策』(千倉書房、1944年)108-20, 138-54頁、南亮三郎『人口論』(三和書房、1954年)221-34頁、及び『人口大事典』(平凡社、1957年)76-9頁を参照。

<sup>23</sup> 「生死の平行法則(1916年6月)」〔『社会学的研究』95-133頁〕とも称している。特に、この論文の108-9頁では、コンラートの研究から引用している。ちなみに、プリンツィングの所見に関しては、塚原仁『人口統計論』(千倉書房、1940年)271頁を、またベルチヨンの説については、高田も「力作」と称している林惠海『人口理論:研究と方法』(刀江書院、1930年)84-102頁を、あるいは高田「日本に於ける出生率増加の原因(1916年1月)」『現代社会の諸研究』211-22頁や、同「最近の出生率減少について(1919年7月)」『現代社会の諸研究』248-9頁、及び同「階級による差別出生率(1931年1月)」『経済論叢』32-1(京都帝国大学経済学会、1931年)68頁を参看。

<sup>24</sup> こうした情勢はデュモン(Arsène Dumont, 1849-1902)によって「社会的毛細管現象」と別称されてもいた〔「貧富と出生率」152-4頁、及び高田「凋落・白人の世界制覇」『外地評論』1-8(1938年8月)39頁〕。

#### 第4節 もし高田がマルサスの文明社会分析に在していたら

人口方程式は資本家的社会にのみならず共産的社会にも適用できる、こうした雄図を高田は抱き、かつ自負してもいた。対照的に、マルサスの方は私的所有制<sup>25</sup>と一夫一婦制が盤石に確立された文明社会の、わけてもイングランド社会の解明にのみ全精力を傾注した。この点では、高田が反社会主義者であったマルサスの著作を隅々まで読み通し、本気で精読しようとはしなかったのも心服に落ちる。そうではあるけれども、もしも高田がマルサスによる文明社会の分析にも目を投じていたなら、人口方程式の解き方は幾らか変じたのではないか、本節ではこの点に焦点を向けながら、整理、概括していきたい。

マルサスは2版『人口論』以降で神学的功利主義に裏付けられた「条件付きの親・人口主義者 (pro-population)」という基本姿勢を一私的所有制と一夫一婦制を基底部に据えた文明社会における「健康で、活動的、かつ勤勞である (industrious) 人口」(〔2〕Ⅱ56頁)、あるいは「健康で、有徳の、かつ幸福な人口」(〔3〕Ⅳ210頁)の緩やかな増加に対する希求を一闡明にしていく。噛み砕くなら、神の恩寵によって、人間の生来的怠惰は私的所有制の下での「境遇の不平等」があるからこそ、勤勞へと矯正されていくと強く唱えた<sup>26</sup>のである。

その際に2つの生活標準を提示している。冒頭部で前触れしておいた「貧窮の標準」と「愉樂の標準」とである。要約するなら、「貧窮の標準」は救貧法の手当て(生活保護)を受けながら性急な結婚・出産に走りがちな最下層階級に向けられた諫言であり、他方「愉樂の標準」の方は救貧法による賃金補助こそ受け取るものの、原則的には自立した結婚生活と中流階級化を志す労働(勤勞)階級への道案内であった。高田の論説との関係で、「貧窮の標準」に絞り込もう。マルサスはこれを、「大多数の国において、下層階級 (lower classes) の人々の間には、その点以下では結婚し、子孫 (species) を増やし続けられない貧窮の標準と言うようなものがあるように思われる。

この標準は国によって異なり、土壤、気候、政治、知識の程度及び文明等の同時に生じている様々な事情によって形成される。それを引き上げるのに寄与する主たる事情は自由、財産権の安全、知識の普及、並びに生活の便宜品と愉樂品 (the conveniences and the comforts of life) に対する嗜好である。それを引き下げる主因たるものは専制と無知である。」(〔2〕Ⅳ109頁)と詳述している。注目すべきは「その点以下では結婚し、子孫を増やし続けられない貧窮の標準」と述べている点である。報告者には、高田の説いた「生活標準」と重なり合って仕方がない。思い合わせてみたい。

2人とも脳裏に「社会成員の大多数を占める最低階級の生活標準」(「私の人口論」200頁、また「生活標準と人口問題」4頁や、「人口に関する小論」231-2頁も参照)を浮かべている(『人口と貧乏』178-80頁)。高田は時として「無産者階級」(「人口に関する小論」232頁、また『人口と貧乏』179、202頁も参照)の「生活標準」(『人口と貧乏』207頁)、もしくは「労働者(階級)の生活標準」(『人口と貧乏』114、230、260頁)と、あるいはまた「社会的標準」(『人口と貧乏』118頁)や「国民(の)生活標準」(『人口と貧乏』163、165頁)と別称したりもしているけれども、こうした生活標準が「結局与えられたる社会組織の下に於けるその所得に比して不相応なりと」(『人口と貧乏』115頁)声高にしているのである。

敷衍しよう。高田は「貧乏〔貧困〕(poverty)」と「窮乏 (misery)」とを峻別している(『マルクス貧困論考』27頁)。高田によれば、「窮乏」とは労働者階級の「伝統的乃至歴史的〔規範的〕なる生活水準」(『マルクス貧困論考』7頁、また同書29頁も参照)を、あるいは「絶対的貧困線」(『マルクス貧困論考』6頁)を下回ることによって(『マルクス貧困論考』27頁)、「生活標準」とは丸で無縁の代物である。直視しているのは「貧乏即ち生計向の上の難儀」(『人口と貧乏』6頁)であり、そのゆえに、「貧乏は生理的概念ではない。飽くまで社会的相対的概念である。」(『人口と貧乏』34頁)という点だけを凝視しているのである。

<sup>25</sup> 高田も「私有財産の組織は、個人をして自ら進みて極度の努力をなさしめる制度である」と述べてはいる(『人口と貧乏』28頁)。

<sup>26</sup> 例えば、小林時三郎『マルサス経済学の方法』(現代書館、1968年)43-68頁や、拙論「マルサスにおける必需品(小麦パン)と便宜品(靴下)」『長崎県立大学論集』54-1(長崎県立大学佐世保校学術研究会、2020年)19-21頁を参照。

繙読し、摘出してみたい。その大前提として、大多数の人がせめて「それだけすれば世間並のものとして恥ずかしくない、と思ふ生活の水準がある。…心落ちつく生活の水準である。恥ずかしくない生活を安定的につづけ得るといふことが、大事な境界線になる…之を決定するものは社会意識乃至社会思潮である」[『マルクス貧困論考』3-4頁]とまず想定している。その上で、もし最低階級の人々がこの「世の中の並みの暮しの標準」[『人口と貧乏』102頁、また同書20、33、101頁や『マルクス貧困論考』5頁も参照]を満たすことができなければ、「一定の体面」(『人口と貧乏』93、101頁、また同書34頁も参照)を保ち得ず、「恥辱乃至不面目を感ずる」[『マルクス貧困論考』6頁]に至り、ついには「生活難」(『人口と貧乏』91、98、99、101、103、104、115、130、131、216、218-20、235、242、244頁等)に陥っていくと展開する。この時に前面に押し出しているのがⅡ節で何度か言及し、また高田自身も「私の未熟ではあるが多年の心血を注いだ社会学組織の中心概念である」(『人口と貧乏』243頁)とまで道破している「力の欲望」、すなわち「権勢、富力、名誉、知力、其他如何なる種類の力に於ける…自己の他人に優れん」[『貧富と出生率』151頁]という欲望の論理<sup>27</sup>である。

一層細説しよう。高田の所論にしたがえば、「根本に於て見栄といふものが源となって」(『人口と貧乏』109頁)、相互の「見えの競争」(『人口と貧乏』109頁)や「虚栄の競争」(『人口と貧乏』46、51頁)、あるいは「体面の為の競争」[『人口に関する小論』229頁]へと駆り立てられていき、「下の方の階級の人とは自分が上の階級の者と、一様に見えようとする」(『人口と貧乏』106頁)。その最たる事例は「欲望の競争」(『人口と貧乏』46頁)や「社会の欲望」(『人口と貧乏』106頁)に関してであり、「社会の新しい欲望は一番高い所の階級若しくはそれに近い階級をもって1つの源としてゐます。その泉から刻々に新しい欲望が下へ下へと流れて行って全体の欲望が漸次に、しかし不断に増加してゆく」(『人口と貧乏』107頁)と繰り広げていく(『人口と貧乏』22-3頁も参照)。そしてその際に打ち捨ててならないのは、

「一朝必要がある時世の中の多くの人間の生活程度を幾らか下げることによって、更に多くを養って行くことが出来るといふこと」(『人口と貧乏』109頁)であると喝破していく。

しかしいま、5版『人口論』の附録部においてはあはれども、マルサスが、もし一定の賃金があって、かつ性急な早婚を避けたとしたなら、「労働階級の習慣は漸次に変化して、社会が前進していく限り、食物量の減少の圧迫がないばかりか、より増加した量の便宜品や愉楽品を享受しながら、その増加率を必然的に緩和させる…あらゆる未婚者や、既婚者でも家族の少ない者は、極めて豊かになるが、他方大家族を持つ者は、疑いもなく時には過酷な圧迫を受けるけれども、一般的には便宜品と愉楽品とを犠牲にすれば、教区手当がなくても自らを扶養できるであろう。」([4] IV 285-6頁)と述べている件を思い返した時、報告者には生活標準をめぐる議論におけるマルサスと高田との類似性が浮かんできてならない。もちろん、高田はマルサスが力説、称揚していた中流階級肥大化論には懐疑的で[『貧富と出生率』161頁]、むしろ非難の目を向けているようさえ読み取れる<sup>28</sup>(『人口と貧乏』10-11頁)。せいぜい、民族の維持との観点から中産階級の没落の回避を説くにとどまっている[『人口政策について』48-52頁]。

また、わざわざ「私は今日の生活難に対して…自ら欲望を制限せよと説いたことがない」(『人口と貧乏』241頁)と断っているように、「自由競争」(『人口と貧乏』29頁)に基づく「生存競争」(『人口と貧乏』71頁)をけっして全否定してはいたわけではない[ただし、グムプロヴィチやヴェブレンと共に「痴人の部類」に分類されたり、あるいは単純な「社会ダーヴィン主義」者に祭り上げられたりするの嫌忌してもいた(『人口に関する小論』223頁、『人口と貧乏』245頁)]。しかし、報告者のように、「マルサスは『怠惰の奢侈』を含んだ『愉楽の標準』の向上を勤労階級に説き、他方でそれを含まない『貧窮の標準』の引き上げを最下層階級に唱えた。」<sup>29</sup>と解するなら、マルサスによって提唱された「貧窮の標準」は「最低階級」における「奢侈の風潮」を戒めようとした高

<sup>27</sup> この点については、赤川学『これが答えだ！少子化問題』(筑摩書房、2017年)152-7頁を参考。

<sup>28</sup> また、赤川学「高田少子化論の進化論的意味」桜井芳生ほか編著『遺伝子社会学の試み』(日本評論社、2021年)68、70-1頁をも参照。

<sup>29</sup> 拙著『増補版 マルサス勤労階級論の展開』(昭和堂、2005年)33-4頁。

田の「生活標準」を彷彿とさせてくるのである。

とはいえ、「マルサスの人口法則の詳細なる吟味」に関心を抱かなかった高田が「貧窮の標準」に寓目しなかったとしても怪訝とは言い難い。高田が「マルサス人口法則の構想と叙述とに於て、生活水準が考慮せられてゐないといふことは勿論誇張であり、それに対する注意はあくまで周到であるといはれ得よう。ただ人口法則の構想に於て、此生活水準が原理的に重要な役目を持ち得ず、殆どそれが常数であるかの如く無作用に終わってゐるといっても、無理ではないであろう。」[『マルクス貧困論考』10頁]との冷評を下しているからである。つまり、問題関心がないままに通読してしまい、「貧窮の標準」の存在に一切気付かなかったのである。だとしたら、高田は一体どこから「生活標準」を、すなわちstandard of living<sup>30</sup>という術語を学び取ったのであろうか。

その場合、高田が「森本博士の精密な調査」(『人口と貧乏』42頁、また同書7頁も参照)に目を留めているのは見過ごせないかもしれない。多言するまでもなく、森本博士とは森本厚吉<sup>31</sup>(1877-1950)のことである。森本は日本で初めて

(1919年)最低生活費の本格的な計測に着手し、その直後から最低生活費と家計調査の方法をめぐって高田の同僚であった汐見三郎(1895-1962)との間で激しい火花を散らした北海道帝国大学の兵(つわもの)教授であった<sup>32</sup>。その森本は1916年5月に*The standard of living in Japan*でジョンズ・ホプキンス大学から哲学博士を授与されていた。類似した先行文献には、ベルリン大学への留学経験(1894-5年)を持ち、1909年にコロンビア大学から哲学博士を取得したペロイト大学のチェーピン(Robert Coit Chapin,1863-1913)による*The standard of living among workingmen's families in New York City*,1909があった。高田は極めて注意深く「貧乏線」[『マルクス貧困論考』2頁]を睥睨つつ、上記の著作から「生活標準」を借用しているように思われる。

言うまでもなく、家計調査自体は、おおよそ、ディヴィス(David Davies,1742-1819)やイーデン(Frederick Morton Eden,1766-1809)の述作によって開拓され<sup>33</sup>、次いでは、ル・プレー(Pierre Guillaume Frédéric Le Play,1806-82)やエンゲル(Christian Lorenz Ernst Engel,1821-96)

<sup>30</sup> より厳密には「生計の標準」とでも訳出できよう。なお、この語は少なくともJ.S.ミルの『経済学原理』に散見できる〔拙論「マルサス『人口論』から見たJ.S.ミルとG.ドライズデール』『長崎県立大学論集』55-3(長崎県立大学佐世保校学術研究会、2021年)60頁〕。また、生活標準に関する全般的議論については、小畑和『出生減退論序説』(村田書店、1994年)121-30頁等を参照。

<sup>31</sup> 氏の評伝は藤井茂『森本厚吉：新渡戸稲造の愛弟子』(盛岡タイムス社、1996年)を参照、とりわけ、高い乳児死亡率や第1次大戦後のスタグフレーションの下で最小生活費の解明に取り組んだ森本が個人的には「アメリカに於ける中流」の生活を高く評価し、逸早くアパートメントハウスを建てたり、また晩婚や「産〔三〕児制限論」を唱和したりしているのは看過できないであろう(同書54、71-2、87、127-8頁)。また、その際「家政学の祖」と呼称されるリチャーズ(Ellen Henrietta Swallow Richards, 1842-1911)らから多大な影響を受けていた点にも留意すべきであろう〔原司郎・酒井康弘『生活経済学入門』(東洋経済新報社、1997年)95頁〕。ちなみに、リチャーズの「優境論(Euthenics)」と家政学との関連を論じた著述は多いけれども〔例えば、今井光映編『家政学教育の発展』(ミネルヴァ書房、1972年)37-73頁、今井光映・紀嘉子『アメリカ家政学史』(光生館、1990年)、セイラ・ステイジ、ヴァージニア・B・ヴィンセンティ著倉元綾子監訳『家政学再考』(近代文芸社、2002年)39-56頁、ヴァージニア・B・ヴィンセンティ著倉元綾子訳『アメリカ・ホーム・エコノミクス哲学の歴史』(近代文芸社、2005年)第5章〕、ここでは、特に、リチャードの「生計費(cost of living)」を子細に分析している松下英夫『ホーム・エコノミクス思想の生成と発展』(同文館、1986年)104-31頁に注目しておきたい。

<sup>32</sup> 多田吉三『日本家計研究史』(晃洋書房、1989年)5章を参照。ちなみに、高田学士「教員生計調査に就いて」『啓明』2-6(1920年)という論文もある。これは高田が「統計的法則と云ふ経験律」(『人口と貧乏』40頁)を軽んじていなかった1証左と言えよう。なお、言うまでもなく、高田は出生性比の法則(女児出生に対する男児出生の超過)を大いに意識していたし〔「私の人口論」197頁〕、また経済的景気が出生率や結婚率の決定因となっているとするジュスマルヒ(Johann Peter Süßmilch,1707-67)の以来の見解をも視野に入れていた〔「最近の出生率減少について」257頁〕。

<sup>33</sup> 例えば、吉尾清『社会保障の原点を求めて』(関西学院大学出版会、2008年)1章並びに3章を参照。なお、ヤング(Arthur Young,1741-1820)を含めた家計調査史の概観は岡崎文規『数と社会』(栗田書店、1942年)45-62頁、奥村忠雄「外国における家計研究の系譜(1)」『大阪市立大学家政学部紀要』9巻(1962年)135-152頁、及び多田吉三『生活経済学』(晃洋書房、1989年)4章等を通して知得できよう。また、眞崎幸治は19世紀の英国における家計調査の子細を整理していて、とりわけ工業都市部の家計が「食料及び家賃の支出」を中心に調べられていることを教示している〔「近代に於ける家計研究史(1)」『統計集誌』723号(東京統計協会、1941年)10-4頁〕。例えば、ヤング(Edward Young)著『ヨーロッパおよびアメリカにおける労働』(1875年)等をも視野に収めている。

の業績によってほぼ確立され<sup>34</sup>、そしてブース（Charles James Booth, 1840-1916）の17巻にも及ぶ報告書『ロンドン民衆の生活と労働』（1902-3年）やstandard of lifeという語句を使用しているラウントリー（Benjamin Seebohm Rowntree, 1871-1954）の『貧乏（poverty）：地方都市生活の研究』（1901年）によって全面的な実践をみたと辿り直されている<sup>35</sup>。それゆえ、高田がマルサス—ミル—マーシャル（Alfred Marshall, 1842-1924）という「生活標準」の系譜に目を向けなかったとしても無理からぬことであつたと推察できはする<sup>36</sup>。「資本主義的発展のいちじるしい社会では、下層の出産力が前近代的な階級的抑圧から解放され…出産力はかえって上層に低く下層に高いという逆の形」<sup>37</sup>を現出させていた当時の時勢を斟酌するなら、結句、高田の慧眼に贅辞を送って然るべきなのかもしれない。

ともあれ、いまその知的源泉を頓着しないとしても、「生活標準×人口=分配係数×生産力」という「人口方程式」の左辺に関するマルサスと高田との見解がかなり近似していることは確認できよう。それはまた右辺にある生産力についても、「資本家的社会の成長期」に限るなら、ほぼ同様のことが言えよう。すなわち、高田は「生産力の増加は人口増加の圧力によって生ずる。けれども一般的には力の優越の為の競争による。或いは資本家の利潤獲得の競争に負ふこともあり、無産者又は中産階級の技術の創意の競争に負ふこともあるであろう」〔「人口に関する小論」234頁〕と述べている。ことに、「各種の労働者が熟練と過去の地位とに従ひ、各正当性の要求を伴ひつつ求める生活水準」〔『マルクス貧困論考』28頁〕との言及は黙過し難い。なぜなら、マルサスは資本家の利潤の源も労働者の勤労や熟練のいかに求めているし、また創造（inventions）を促す余暇消費を中流階級や勤労階級に奨励している、それに「熟練と勤労の程度」の差異によって生活標準が

異なってくるとも明言しているからである<sup>38</sup>。ただし、マルサスにあつては、「力の欲望」ではなく、「勤労への最良の刺激はわれわれの境遇を改善しようとする希望と欠乏にたいする恐怖であつて欠乏そのものではない」や、あるいは「先行および重要性の順位は勤労へと刺激する欲望（want）が先である」との表現にとどまてはいる<sup>39</sup>。

残された変数は「分配係数」であり、再論になるけれども、これこそがマルサスと高田の議論を画然と区分させよう。マルサスも「市民的自由」や民衆「教育」の拡大による「貧窮の標準」の向上に期待を寄せてはいた<sup>40</sup>けれども、あくまでも資本制社会の枠組みの中での社会改革に固執していた。いわば、「保守的自由主義」<sup>41</sup>者であつた。それに対して、高田の方は体制を超える社会改革をも視野に入れた壮大な企てを構想していた。「社会民主主義」的自由主義者とも名付けるのが相応しいかもしれない。このことが少子化のこれからを考えていくうえで良き材を提供してくれているように思える。

掘り下げておきたい。高田は資本制社会と社会主義的社会とを「富の分配の方法」（『人口と貧乏』26頁）もしくは「社会の分配組織」（『人口と貧乏』33頁）、あるいは「社会の階級組織」（『人口と貧乏』22頁）における相違と、発揮される「社会の全生産能力」（『人口と貧乏』32頁）の異同という2つの側面から分析していき、とりわけどちらの体制の下でも、「人間に根差している力の欲望」（『人口と貧乏』31頁）は、取りも直さず「他人に優れ越えことを求める…病み難き要求」（『人口と貧乏』32頁）が貫流、作用していくことを強調して、何れの制度の方がより一層の「階級的懸隔の短縮」（『人口と貧乏』26頁）を実現可能なのかを推し量っている。こうした思量の帰結によれば、無論、資本制社会下でも「国家社会主義的色彩が強ければつきほど」、「社会政策的、連帯主義的

<sup>34</sup> 例えば、郡菊之助『統計学研究』（同文館、1930年）6編を参照。

<sup>35</sup> 差し当たり、阿部實『チャールズ・ブース研究』（中央法規出版、1990年）1部を参着。また汐見三郎『経済統計研究』（内外出版、1923年）228-30頁も手引きになろう。

<sup>36</sup> 柳田ほか編著『マルサス ミル マーシャル』（昭和堂、2013年）序文viii-xvii頁を参照。

<sup>37</sup> 『人口大事典』534頁。

<sup>38</sup> 前掲拙著25-6、33、47-8、75頁。

<sup>39</sup> 同上拙著44、191頁。

<sup>40</sup> 前掲拙著26、283-7頁、並びに飯田裕康ほか編著『マルサスと同時代人たち』（日本経済評論社、2006年）241-7頁等を参照。

<sup>41</sup> 佐藤光・中澤信彦編著『保守的自由主義の可能性』（ナカニシヤ出版、2015年）3章を参照。

なる方法」は有効な「除貧の方途」とはなりうる（『人口と貧乏』26-7頁）、しかしアルバルト・ランゲ（Friedrich Albert Lange, 1828-75）が指摘しているように、「凡夫にとりて体面は生命よりも尊い」（『人口と貧乏』34頁）という態様には何等変わらない、それに比べて、社会主義的社会では、全生産力の低下により「今日の貧民生活よりも低いくらしに甘んじなければな」（『人口と貧乏』33頁）らないかもしれないけれども、「すべての人は皆、いはゆる世間並みの生活を営むことが出来る」（『人口と貧乏』33頁）、そこでは「分配の不等なきところに貧乏なし…生計の不等なし」（『人口と貧乏』34頁）という状況が醸成される、このように論結されている。そればかりか、社会主義的社会でも、「力の誇示」は存続し、「金儲けの為の競争はやむとしても、仕事のための競争」という姿態でもって人間生来怠惰観を優に超克していけるであろうとも論じている（『人口と貧乏』32頁）。

つまり、高田の深慮では、社会主義的社会の方向に傾いたとしても、分業による仕事の細分化は間断なく進んでいき、それに随伴して文化も一層発展し、「精神的文化内容の生産力を大ならしめる」と仮想されているのである〔牧野「高田保馬の貧困論」313-5頁を参照〕。併せて、かつては「亜米利加で女子の高等教育が盛んになりました」（『マルサスの二つの理論』8頁）と傍観視していた女子教育の拡充にも弾みが付き、「婦人を因襲の鐵鎖より解放」（『人種問題私見』190頁）し、「婦人の経済的独立」（『人種問題私見』199頁）が日常化し、男性への経済的依存が軽減されて、家族主義も次第に後退、弛緩していくと遠望されているのである〔杉田「少子化問題と社会政策」27-8頁や、牧野「高田保馬の貧困論」320頁を参照〕。こうした高田の鳥瞰図は今日の様相に極めて酷似していよう。何が考えられようか。

昨今の近況では、仕事の細分化は予測以上に急速であるのみならず、同時にAI（人工知能）革命の進行によってロボット労働との競合<sup>42</sup>さえ余儀なくされつつある。それに非正規雇用の度合い

も一段と高まり、終身職にあっても勤務評価を加味した賃金形態が広がりつつもある。加えて、ジェンダーギャップ（男女格差）の是正もさほど進捗してはいない。それゆえ、こうした状況下での「希望出生率1.8」<sup>43</sup>との掛け声はとても虚しく響く。増加してきている働く高学歴女性が結婚や出産をためらいがちなのも道理であり、離婚数の増加も納得できる。

例えば、筆者の凡眼には、これらの背景には、高田によって予期された家族主義の衰微が伏在しているように映っている。マルサス主義的結婚システム<sup>44</sup>では、子供の養育は基本的にすべてその自主独立した両親の双肩に委ねられる。そしてわが国では、それが当然のごとく受け入れられ、すっかり定着してきている感があり、不動かのようなのである。少子化の主因はこのことから生じてきているように見える。たとえマルサス主義的結婚システムが主として作用していくとしても、それと並行して当該親族による扶助、並びに他者や一人親世帯の子育てへの四囲〔身の回りの地域〕の理解が再生され、深まっていかない限り、少子化には容易に歯止めがかからないと考える。次世代を担う子供たちが愛情の絆を心底から感受し、成長していくには、精神的にもゆとりのある家庭生活と共に、周囲における子育ての社会化に対する意識の涵養が不可欠であろう。親にとっても、また周りの人々にとっても子宝であるとの社会意識が共有されることこそ、緊要なのである。高田の遠慮はこのことをさりげなく暗示、教示してくれているように思われてならない。そうでなければ、自由婚や、また同性婚やLGBTにおける生殖医療<sup>45</sup>を介しての出産など毛頭議論の対象に挙がってこないであろう。ただ少子化の行く末を対岸の火として漠然と眺めることになってしまう。

## 第5節 結びに代えて：優生学批判

最後に、蛇足を付記し、締めくくらせてもらいたい。それは、高田が避妊による「性（欲）生活の合理化」（『私の人口論』188頁、「人口政策の缺乏」58頁）の、すなわち「人口の自己制限」（『人

<sup>42</sup> コンスタンテ・クルツ、フランク・リガー著木本栄訳『無人化と労働の未来：インダストリー4.0の現場に行く』（岩波書店、2018年）。

<sup>43</sup> 赤川『これが答えだ！少子化問題』16-25頁等を参照。

<sup>44</sup> 拙論「マルサス主義的結婚システム論の一展開」『マルサス ミル マーシャル』46-75頁。

<sup>45</sup> 取り敢えずは、イレーヌ・テリー著石田久仁子・井上たか子訳『フランスの同性婚と親子関係』（明石書店、2019年）を参照。

口と貧乏』211-3頁)の禁を説いた際に、当時街頭歩いてきた優生学の波濤に敢然と立ち向かおうとしていたという史実である。この点は間々忘失され、貴重な教訓の芽を摘んできているように感じている。高田が「都会に於いても知識階級を除く外は、未だ産児制限の考へ方を十分になされるまでには進んでゐない」〔「生活標準と人口問題」8頁〕と観察し、「産児調節の運動の勃興とその知識の普及」〔「階級による差別出生率」80頁〕に対して警鐘を打ち鳴らしたのは1920年代半ばのことである。その少し前の22年3月10日～4月5日には、改造社(社長・山本実彦)の招待によって高名な産児調節運動家のサンガー(Margaret Sanger, 1883-1966)夫人がロンドンでの第5回新マルサス主義・産児制限国際会議(7月11～14日)に出席する途次に日本に立ち寄り、蛾然その機運が高まっていた時期<sup>46</sup>であった。大事なはそのサンガーが優生思想の持ち主でもあった<sup>47</sup>という点である。同じ頃にやはり改造社が招いたウエルズ(Herbert George Wells, 1866-1946)も同様で<sup>48</sup>、1903年に社会学会の設立委員に加わっていたウエルズは翌年5月16日に優生学の元祖ゴールトン(Francis Galton, 1822-1911)が第1回社会学会(ロンドン大学)で行った講演「優生学：定義、展望、目的」を拝聴し、討論も交わしていた<sup>49</sup>。このウエルズは宗教界からの激しい批判からダーウィンを擁護したハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825-95)の熱烈な信奉者で、かつマルサスをも称賛していたし、またサンガーとも親交があった<sup>50</sup>のである。

脇道から本筋へと戻ろう。とにもかくにも、高

田が警戒していたのは産児制限思想の移入ばかりではなく、優生学の無防備な移植であった。この部面をけっして見過ごしてはならない。されば、高田による優生学への疑念の表明は1913年8月にまで遡れる。1つは、『アメリカ社会学誌』18巻6号(1913年5月)に掲載された初代のアメリカ社会学会会長ウォード<sup>51</sup>(Lester Frank Ward, 1841-1913)による「優生学、優境学、及び全般的福祉に関する科学(eudemics)」を紹介した資料である。その中でウォードは、医師(04年にエディンバラ大学・医学博士となる)にて女性解放にも共鳴していたサリービー(Caleb Williams Saleeby, 1878-1940)が説いた<sup>52</sup>消極的優生学(精神的、肉体的劣等者を排除する)や積極的優生学(優良者を選択し、人類を改善していく)をエリート主義の幻想として非難していた。高田はこれを摘録し、優生学運動は「自発的ナル向上ヲ阻止シ…人為的人種ヲ生センノミ」とくくっている〔『ユウゼニックス』批判』『京都法學會雑誌』8巻8号(京都法學會1913年)242頁〕。もう1つは、ダーウィン(「貧富と出生率」142頁)の友人の1人で、優生教育協会(1907年11月の創設)の地方へ普及に尽力したマーシャル(William Cecil Marshall, 1849-1921)が同協会の機関誌『優生評論』(07年11月の創刊)の5巻2号(1913年7月)に寄稿した「経済的狀態が出生率に及ぼす効果」の概要を伝えたものである〔「経済的條件ノ出生率ニ及ボス影響」』『京都法學會雑誌』8巻11号(京都法學會1913年)〕。高田は無神論であった優生学者のピアソン(Karl Pearson, 1857-1936)の所論<sup>53</sup>から1文を引きながら<sup>54</sup>も、「優良

<sup>46</sup> 太田典礼『日本産児調節百年史』(人間の科学社、1986年)123-6頁、久保秀史『日本の家族計画史』(日本家族計画協会、1997年)20-1頁、エレン・チェスラー著早川敦子訳『マーガレット・サンガー』(日本評論社、2003年)211-3頁、及び荻野美穂『「家族計画」への道』(岩波書店、2008年)37-45頁を参照、また、サンガーの実践運動に関しては、荻野美穂『生殖の政治学』(山川出版社、1994年)68-107、128-35、146-60頁等を参照。

<sup>47</sup> 荻野『生殖の政治学』199-208頁。

<sup>48</sup> チェスラー前掲訳書211-2頁。

<sup>49</sup> A.H.ハルゼー著潮木守一訳『イギリス社会学の勃興と凋落』(世織書房、2011年)44頁、エドウィン・ブラック著貴堂嘉之監訳『弱者に仕掛けた戦争：アメリカ優生学運動の歴史』(人文書院、2022年)269頁、及びSociological Papers (London:Macmillan & Com.,1905),Vol.I.pp.45-50,58-60。

<sup>50</sup> ノーマン&ジーン・マッケンジー著村松仙太郎訳『時の旅人：H・G・ウエルズの生涯』(早川書房、1988年)200、205、256、632-3頁。

<sup>51</sup> ウォードについては、後藤昭次訳『社会進化論』(研究社、1975年)に所収されている本間長世「社会進化論とアメリカ」16-9頁等を参照。また、高田が「私の夢とヲオドの夢とは相合して…新なる夢となる」〔「人種問題私見」199頁〕と語っているように、高田は特にウォードの『純粋社会学』(1903年)を高く買っていた。

<sup>52</sup> サリービーが8年3月にイギリス社会学会で行った講演「優生学への障害」や、『親と人種文化』(1909年)等の諸著作における見解については、富山太佳夫「或る優生学の運動家についてのメモ」『成城文藝』127号(成城大学文芸学部、1989年)8-9頁を参照。

ナル分子ヲシテ益生殖ヲ制限シ其出生率ヲ減少セシメントスルモノ、吾人ハ之ニ反對セサレヲ得サルナリ」と結んでいる（同論文228頁）。

加えて、斎藤茂三郎の『優生学：人類の遺伝と社会の進化』（不老閣書房、1916年）を書評した「優生学是非〔1916年8月〕」〔『社会学的研究』348-57頁〕に至っては、優生学批判をさらに明確にしている。すなわち、消極的優生学に対しては、「今日の劣等分子をして十分に繁殖せしめても、文化の進歩がその為遅々たる理由は寸毫も存しない。…劣等分子除去の方策はただその無意義なるを疑ふ」〔同書354-5頁〕と論難し、また積極的優生学についても、生来的才能「に重きを置き、代々その少数者によりてのみ獨占せられむ事を熱望する…一種の貴族主義」〔同書352頁〕と排し、たとえ「社会に少数の優秀分子を生じ得るとしても多数の凡庸人は依然として存する」〔同書357頁〕と論評し、「優生学の主張は根のない幽霊のやうなものに過ぎぬ」〔同書350頁〕と断じている。このゆえに、高田は例えば「発明的天才」〔「人口に関する小論」224頁〕を「偶然的要素」〔『人口と貧乏』29頁〕と解し、「社会は一方に於て特に優秀なる少人数、他方に於て多数の凡庸人に相分れる」〔「優生学是非」356頁〕のが自然であって、しかもこの「優秀の素質」は階級の上下を問わず存在していて〔牧野「高田保馬の貧困論」331頁〕、「今や、生まれたるものは盡（ことごと）く生きる権利をもつ…胎児は一ヶ月目からすでに出生の権利をもつてゐる」のであると見定めたのである〔「人口政策の缺乏」55頁、また牧野「高田保馬の人口論」12頁も参照〕。そして「質的人口政策…これらは私の主張の内容ではない」〔「人口政策の缺乏」64頁、また「人口政策について（1937年7月）」〔『民族と経済』（有斐閣、1940年）52-3頁も参照〕ときっぱりと断言している<sup>55</sup>。

他方奇しくも、マルサスも優生学的な見地には気迷いを覚えていたように見える。間違いなく、

マルサスは「体軀 (bodily frame) における自然的欠陥」〔〔2〕 I 52頁〕に気付いていたし、また人間には様々な「才能 (talents)」が存在し、発揮されるのを認めてもいた〔〔2〕 VI 62、72頁、〔5〕 上429頁〕。しかし才能に大きく左右される機械の改善については、これを「偶然的諸事情」に負うと帰している<sup>56</sup>。同様に、再三にわたって「人間の自然的怠惰 (natural indolence)」を反復するけれども<sup>57</sup>、実際には「人間の能力 (faculties)」の改善、発達に〔〔2〕 吉田訳VI 16頁、〔4〕 III 81頁〕、あるいは「人間の工夫力 (ingenuity)」〔〔3〕 吉田訳VI 220頁、5版III 175頁〕により信を置いてもいたように窺われる。では、マルサスはどの段階でこうした考え方に傾斜していたのだろうか。初版『人口論』の次のような記述が思い浮かぶ。すなわち、マルサスはそこで、「最も優れた精神が作られるのは…独創的思考の努力、新しい組み合わせを作り、新しい真理を発見すること努力によるように思われる。」〔〔1〕 262頁〕、しかしこうした最高 (大) の「才能は疑いもなく精神の大変目立った立派な特徴ではあるけれども、人間の性格の全部をなすものとはけっして考えることができない」〔〔1〕 257頁〕、とはいえ、「非常に年少な子供たちの感受性 (susceptibility) の著しい相違」は「元々の胚種 (original germs) にある種の相違」〔〔1〕 270頁注1〕から生じてきていると論を展開しているのである。平易に置き換えるなら、マルサスは早くから「おそらく、小麦のどの2つの穀粒〔胚種〕も正確には同じではない。土壌〔現実の社会〕は疑いなく発生する葉〔人間の性格〕の主要な相違を作るが、おそらくすべての相違を作りはしない」〔〔1〕 270頁注1、亀甲内引用者〕と解釈していたのである。

ともあれ、高田もマルサスも優生学的な人口政策には反対であり、個人の自由意思に基づく結婚や出産を大前提としていたのは確実である。しか

<sup>53</sup> ピアソンについては、差し当たり、安藤洋美『統計学けんか物語：カール・ピアソン一代記』（海鳴社、1989年）を参照。

<sup>54</sup> ただし、高田は統計学者としてのピアソンには注意を払っていて〔「最近の出生率減少について」261頁〕、かつその相関関係に関する考察は当時の声価を得ていた〔宗藤圭三『統計的法則の根拠』（弘文堂書房、1935年）60頁〕。

<sup>55</sup> 1910年代には、日本においても「優生—優境主義」の論議が13年に創立された日本社会学院（会長は建部遯吾）を中心に高まり、27年に組織された内閣人口食糧問題調査会による優生学的見地を盛り込んだ30年の答申へとつながっていき、最終的には1940年の国民優生法へと結実した〔小島宏・廣嶋清志編『人口政策の比較史』（日本経済評論社、2019年）81-7頁〕。したがって、こうした時流に水を差そうとした高田の見解は勇猛極まりない発言であったと言えよう。

<sup>56</sup> 前掲拙著157頁。

<sup>57</sup> 前掲拙著21、70頁。

し近年では、出生前診断を受診しての命の分別、選択が開始されてきている<sup>58</sup>。2人の目には、これらはさぞかし「人為的で不自然な方法」〔4〕VI263頁〕と焼き付くのではないだろうか。高田は戦前から高等学校や大学の卒業生の就職事情に注視していたし〔『人口と貧乏』145-6頁〕、また教育施設の「都市偏重」〔「人口政策の缺乏」61頁〕を憂慮して、「学校等の徹底的なる地方都市への分散」〔「人口政策について」47頁〕を提起してもいた。2人なら、きっと妊娠後の健全な母親による育児を支援する養育（2次）優生学の推進に両手を挙げて賛同したのでないだろうか<sup>59</sup>。生まれるべく出生してきた子供を健康に育成し、適切な教育を施す、両者ともこう願望したことであろう<sup>60</sup>。ただし、その際に指針として据えられるべき生活標準は「貧窮の標準」ではなく、「愉楽の標準」の方であろう<sup>61</sup>。高田は、資本家的社会の爛熟期に入ると、労働階級も人為的出生制限の社会的規範化〔「人口に関する小論」239頁〕を通して生活標準〔「愉楽の標準」〕の累進的な向上を遂げていくと見通していたのである。もしそうだとしたら、この達見は囚らずも限りなくマルサスの中流階級肥大化論<sup>62</sup>に接近しているように見える。報告者の曇った僻見であろうか。

## 引用文献一覧

（邦訳書を併記している原文引用にあたっては、それが全訳である場合、原典との照合のうえで訳書の当該頁のみ付記した。また訳書からの引用に際しては幾分改訳を施したところもある。）

- [1] T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 1st ed. (London: J. Johnson, 1798)〔永井義雄訳『人口論』(中央公論新社、2019年)〕
- [2] T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 2nd ed. (London: J. Johnson, 1803)

〔吉田秀夫訳『各版対照人口論 I～IV』(春秋社、1948-9年)〕

- [3] T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 3rd ed. 2 vols. (London: J. Johnson, 1807)〔吉田秀夫訳『各版対照人口論 I～IV』(春秋社、1948-9年)〕
- [4] T.R.Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 5th ed. 3 vols. (London: John Murray, 1817)〔吉田秀夫訳『各版対照人口論 I～IV』(春秋社、1948-9年)〕
- [5] T.R.Malthus, *Principles of Political Economy*, 1st ed. (London: John Murray, 1820)〔吉田秀夫訳『経済学原理上・下』(岩波書店、1937年)〕

補記：本稿をまとめるにあたって、特に関係資料の収集に際して、吉野浩司（鎮西学院大学・現代社会学部教授）氏、並びに畑岡孝哉（京都大学大学院農学研究科・生物資源経済学専攻）君の手を大変煩わせた。お二人からの温かいご支援がなければ、脱稿できなかったと思う。ここに、心よりのお礼を付記させていただきたい。

<sup>58</sup> 利光恵子『受精卵診断と出生前診断：その導入をめぐる争いの現代史』(生活書院、2012年)を参照。

<sup>59</sup> 富山太佳夫「或る優生学の運動家についてのメモ」9頁。

<sup>60</sup> 拙論「マルサス主義的結婚システム論の一展開」47-52頁、一方、高田は産児制限の1因を「産児に成る可く都合良き生活条件を與へ社会の高位に上らしめんが為」に求めている〔「貧富と出生率」151頁、また「私の人口論」208-9頁、及び牧野「高田保馬の貧困論」316頁をも参照〕。

<sup>61</sup> 拙論「マルサスにおける『貧窮の標準』と『愉楽の標準』」柳田編『コンフォートの経済学：愉楽、快適、安楽の標準という系譜（仮題）』(昭和堂、2023年)に収載予定。

<sup>62</sup> 実際には、高田はベルンシュタイン(Eduard Bernstein, 1850-1932)らに依拠しつつ、「文明の進歩に伴ひて中等社会は減少の機運を示さず、衰滅の兆候を現はすことなし。もとより旧き中等社会は一部分廃れつつ…新中等社会の勃発しつつあるあり」と論じている〔「現在文明の迷妄生産政策の否定」362頁〕。ただし、高田がどの程度ベルンシュタインの「中間階級増大論」から影響を受けていたのかを確定していくのは甚だ至難であろう〔ピーター・ゲイ著長尾克子訳『ベルンシュタイン』(木鐸社、1980年)250-61頁〕。